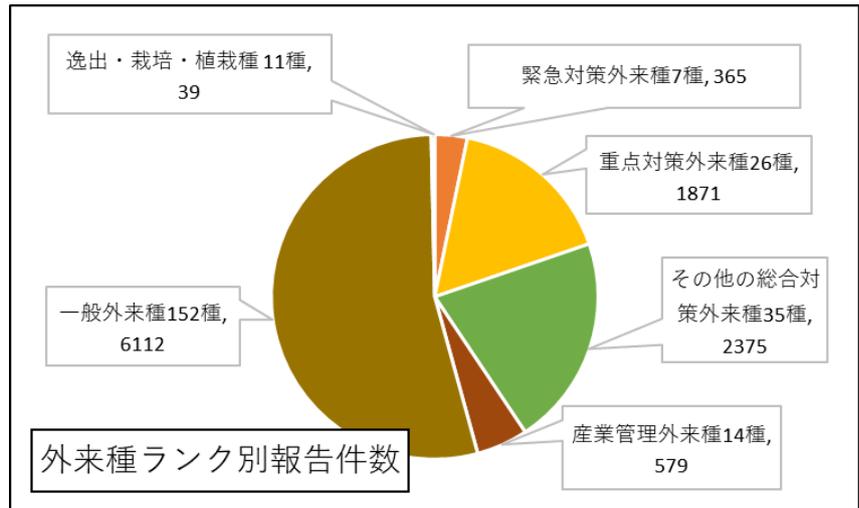


植物調査結果

(1) 調査結果の概要

平成28年4月からはじめた外来種に係るモニタリング調査について、植物の概要をまとめた。外来種報告件数は245種11341件である。

内訳は、円グラフで示すように、特定外来生物でかつ「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト(以下、生態系被害防止外来種リストという。)」にある総合的に対策が必要な外来種のうち、緊急対策外来種(以下、「緊急対策外来種」という。)の報告件数は7種365件であった。



また総合的に対策が必要な外来種のうち、重点対策外来種は26種1871件、同じくその他の総合対策外来種は35種2375件であった。

さらに適切な管理が必要な産業上重要な外来種(以下、産業管理外来種という。)は14種579件であった。

それ以外の一般外来種は152種6112件、栽培・逸出・植栽種11種39件であった。

今回の報告件数11341件の内訳をみると、環境省の生態系被害防止外来種リストに挙げられている緊急対策外来種、重点対策外来種、その他の総合対策外来種、産業管理外来種の報告件数は5190件、それ以外の一般外来種等は6151件であり、およそ半々であった。

報告データの整理について

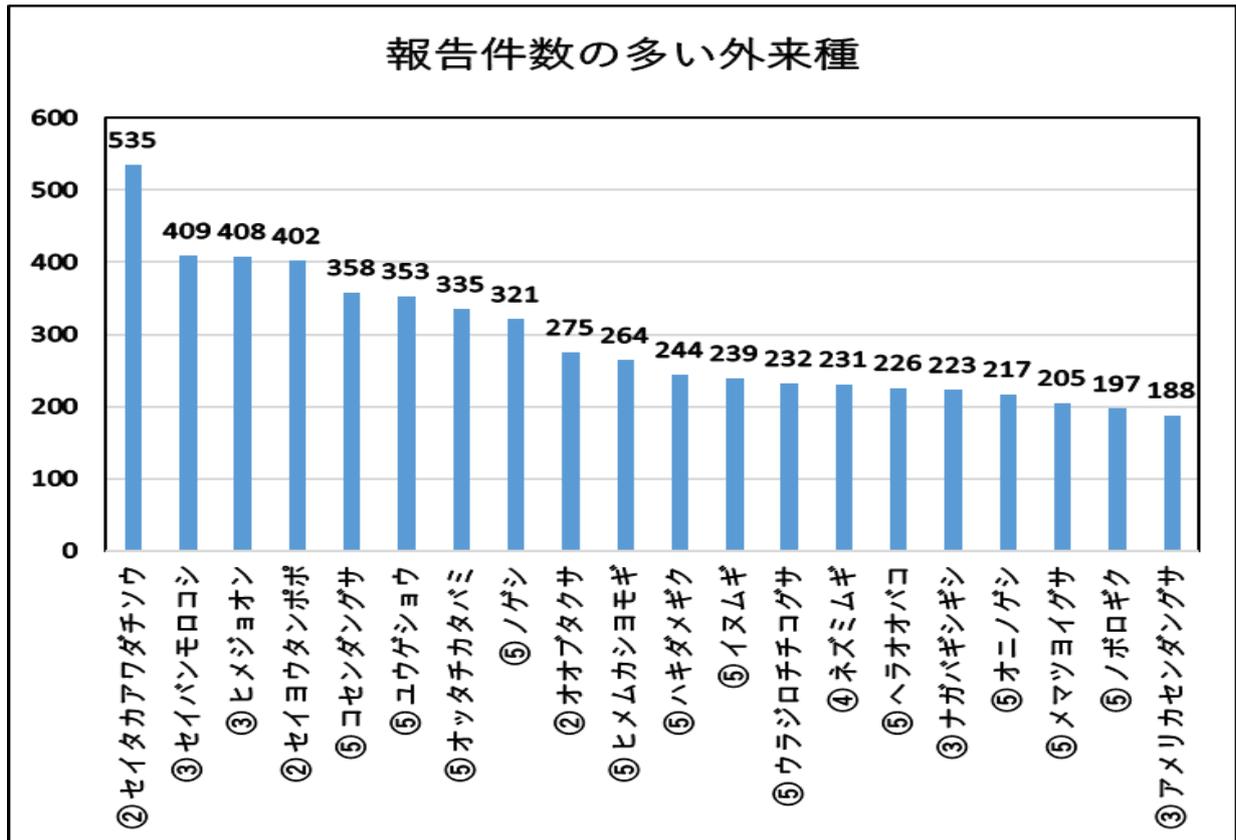
報告データを集計するにあたりいくつかの課題があった。植物の和名については同一種に対して別名が存在することが多く、これらを標準名に統一する必要があった。以下の表に基づいて変更した。そのほか誤字等については適宜正名に修正した。

この名を	こちらの標準名に変更	この名を	こちらの標準名に変更	この名を	こちらの標準名に変更
アオビユ	ホナガイヌビユ	シロノセンダングサ	コシロノセンダングサ	ヒロハウシノケグサ	ヒロハノウシノケグサ
アカツメクサ	ムラサキツメクサ	シンジュ	ニワウルシ	ヒロハギシギシ	エゾノギシギシ
アカバナユウゲショウ	ユウゲショウ	チヂミザサ	ケチヂミザサ	ホウキグサ	ホウキギ
アシ	ヨシ	トウグワ	マグワ	ボロギク	ノボロギク
アレチマツヨイグサ	メマツヨイグサ	ニセアカシア	ハリエンジュ	ホンタデ	ヤナギタデ
イ	イグサ	ノゲイヌムギ	ヤクナガイヌムギ	マルバクワモドキ	オオブタクサ
オオアラセイトウ	ショカツサイ	ハコベ	コハコベ	マルバルコウソウ	マルバルコウ
オオジシバリ	オオチシバリ	ハナダイコン	ショカツサイ	ヤブガラシ	ヤブカラシ
オオバトンボソウ	ノヤマトンボ	バラモンギク	キバナムギナデシコ	ヤマイモ	ヤマノイモ
オニマタタビ	キウイフルーツ	ハルジョオン	ハルジオン		
カラシナ	セイヨウカラシナ	ハルノゲシ	ノゲシ		
クサニワトコ	ソクズ	ヒカゲイノコヅチ	イノコヅチ		
コンフリー	ヒレハリソウ	ヒメクマツヅラ	ハマクマツヅラ		
ジシバリ	チシバリ	ピラカンサ	トキワサンザシ		

報告件数の多い外来種

報告件数の最多 20 種について下にグラフを示す。最も多かった 1 位は②重点対策外来種であるセイタカアワダチソウ 535 件であった。続いて 2 位は③その他の総合対策外来種であるセイバンモロコシ、さらに 3 位は同じく③のヒメジョオンであった。4 位は②のセイヨウタンポポである。5 位は⑤一般外来種のコセンダングサとなる。

①緊急対策外来種は最多 20 種の中には出てこない。26 位でアレチウリ 174 件が現れる。また④産業管理外来種は 14 位でネズミムギ 231 件が現れる。



上のグラフは最多 20 種のグラフであるが、この 20 種の中に①緊急対策外来種はなく、②重点対策外来種は 3 種、③その他の総合対策外来種は 4 種、④産業管理外来種は 1 種、⑤一般外来種は 12 種である。それでは最多 40 種で見るとその割合はどうなるか、最多 60 種はどうなるか、これを整理したものが下表である。

No	外来種ランク	最多20種	最多40種	最多60種	最多80種	最多100種
①	緊急対策外来種	0	2	2	4	4
②	重点対策外来種	3	5	8	12	16
③	その他の総合対策外来種	4	9	13	18	22
④	産業管理外来種	1	2	4	5	8
⑤	一般外来種	12	22	33	41	49
⑥	逸出・栽培・植栽種	0	0	0	0	1
	合計	20	40	60	80	100

この表から興味深いことがわかる。一般外来種に注目すると、最多 40 種なら 22 種、最多 60 種なら 33 種、最多 80 種なら 41 種、最多 100 種なら 49 種となっている。それぞれ約半分を占めている。外来種だけではあるが、互いにバランスをとりながら生育していることを思わせる。

環境別報告件数

今回の調査では、環境を4つに分けた。実際の調査では必ずしも4つの型に当てはまらない場合もあったのではないと思う。しかし細かく設定すると傾向がとらえられなくなる懸念もあり、いずれか1型を選ぶことをお願いした。とりあえず全体としてみた場合、次のような結果となった。

	A (雑木林)	B (河川敷)	C (水田・休耕田・畑)	D (市街地)	報告件数計
緊急対策外来種	8	254	70	33	365
重点対策外来種	221	684	505	461	1871
その他の総合対策外来種	172	930	672	601	2375
産業管理外来種	73	271	133	102	579
一般外来種	603	1832	1940	1737	6112
逸出・栽培・植栽種	6	22	5	6	39
合計	1083	3993	3325	2940	11341

全体の報告件数が最も多かった環境はB河川敷 3993 件であった。最も少なかった環境はA雑木林 1083 件であった。A:B:C:D=1:4:3:3となる。河川敷に外来種が多いといっただろうか。それとも観察地点が河川敷に偏って多かったというべきか。

緊急対策外来種では河川敷からの報告が圧倒的に多いことに注目する必要がある。緊急対策外来種のアレチウリ、オオキンケイギク、オオフサモ、オオカワヂシャなどいずれも河川敷で繁茂する。

下表は、種ごとに環境別報告件数を集計したものである。データは緊急対策外来種、重点対策外来種、その他の総合対策外来種、産業管理外来種、一般外来種、逸出・栽培・植栽の順になっており、それぞれについては報告件数の多い順に並べてある。

No	和名	外来種ランク	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計
1	アレチウリ	緊急対策外来種	7	135	29	3	174
2	オオキンケイギク	"	1	31	32	28	92
3	オオフサモ	"		40	5		45
4	オオカワヂシャ	"		38	3	2	43
5	ミズヒマワリ	"		6	1		7
6	ナルトサワギク	"		3			3
7	ポタンウキクサ	"		1			1
8	セイタカアワダチソウ	重点対策外来種	60	192	157	126	535
9	セイヨウタンポポ	"	46	110	112	134	402
10	オオブタクサ	"	40	125	82	28	275
11	コマツヨイグサ	"	12	47	35	40	134
12	ニワウルシ	"	17	31	14	25	87
13	マルバルコウ	"	5	17	31	19	72
14	キショウブ	"	7	29	15	9	60
15	マメアサガオ	"	5	28	16	7	56
16	シナダレスズメガヤ	"	4	18	4	12	38
17	ノハカタカラクサ	"	8	8	4	17	37
18	オランダガラシ	"	4	20	5	5	34
19	メリケンガヤツリ	"		27	1	4	32
20	アメリカアサガオ	"		6	3	9	18
21	トウネズミモチ	"	3	3	2	8	16

表 外来種の環境別報告件数(1)

No	和名	外来種ランク	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計
22	ホテイアオイ	重点対策外来種つき	2	11	2	1	16
23	オオアワダチソウ	〃	5	3	5		13
24	マルバアサガオ	〃		3	5	2	10
25	アイノコセイヨウタンポポ	〃	1	1	3	3	8
26	ヒメマツバボタン	〃	1			6	7
27	ツルニチニチソウ	〃	1		3	2	6
28	ヒメイワダレソウ	〃			3	2	5
29	イタチハギ	〃		2		1	3
30	コカナダモ	〃		1	2		3
31	アサガオ	〃			1	1	2
32	アマゾントチカガミ	〃		1			1
33	オオカナダモ	〃		1			1
34	セイバンモロコシ	その他の総合対策外来種	13	193	88	115	409
35	ヒメジョオン	〃	47	122	122	117	408
36	ナガバギシギシ	〃	12	111	67	33	223
37	アメリカセンダングサ	〃	24	61	70	33	188
38	セイヨウカラシナ	〃	2	126	37	14	179
39	アメリカオニアザミ	〃	10	22	46	64	142
40	シマスズメノヒエ	〃	14	55	42	30	141
41	エゾノギシギシ	〃	5	53	37	18	113
42	アレチヌスビトハギ	〃	16	52	22	8	98
43	オオオナモミ	〃	2	30	37	2	71
44	ムシトリナデシコ	〃	2	9	19	22	52
45	ハルシャギク	〃	2	15	15	18	50
46	ヒメツルソバ	〃	3	7	5	35	50
47	タカサゴユリ	〃	3	2	10	30	45
48	シャクチリソバ	〃		17	4	6	27
49	メリケンカルカヤ	〃	3	3	9	11	26
50	キシユウスズメノヒエ	〃		12	8	4	24
51	ハナニラ	〃	5	3	4	12	24
52	ヤナギハナガサ	〃		8	4	7	19
53	フランスギク	〃		4	6	8	18
54	ヒメヒオウギズイセン	〃	5	1	8	3	17
55	アレチハナガサ	〃		6	5	3	14
56	ホシアサガオ	〃		3	3	2	8
57	アメリカネナシカズラ	〃	1	5	1		7
58	オオクサキビ	〃		4			4
59	オオキバナカタバミ	〃	2			1	3
60	トキワサンザシ	〃	1		1	1	3
61	ハルガヤ	〃		3			3
62	ナンキンハゼ	〃		1		2	3
63	ケナシヒメムカシヨモギ	〃		1			1
64	シンテツポウユリ	〃				1	1
65	タチスズメノヒエ	〃				1	1
66	ツルドクダミ	〃			1		1
67	ハマクマツヅラ	〃			1		1
68	ペラペラヨメナ	〃		1			1

表 外来種の環境別報告件数(2)

No	和名	外来種ランク	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計
69	ネズミムギ	産業管理外来種	21	105	58	47	231
70	ホソムギ	〃	4	43	23	15	85
71	ハリエンジュ	〃	19	29	15	18	81
72	ナヨクサフジ	〃	1	58	17	1	77
73	カモガヤ	〃	4	12	9	8	33
74	オニウシノケグサ	〃	1	9	2	5	17
75	モウソウチク	〃	10	1	1	1	13
76	ナギナタガヤ	〃	4	3	3	1	11
77	オオアワガエリ	〃		5	1	2	8
78	キウイフルーツ	〃	5	1		2	8
79	アメリカスズメノヒエ	〃		1	4	1	6
80	ハチク	〃	3	2			5
81	マダケ	〃	1	1		1	3
82	コヌカグサ	〃		1			1
83	コセンダングサ	一般外来種	33	116	134	75	358
84	ユウゲショウ	〃	19	106	126	102	353
85	オッタチカタバミ	〃	33	86	122	94	335
86	ノゲシ	〃	36	83	101	101	321
87	ヒメムカシヨモギ	〃	31	61	77	95	264
88	ハキダメギク	〃	26	23	126	69	244
89	イヌムギ	〃	35	87	57	60	239
90	ウラジロチチコグサ	〃	19	54	53	106	232
91	ヘラオオバコ	〃	10	128	41	47	226
92	オニノゲシ	〃	14	56	89	58	217
93	メマツヨイグサ	〃	13	69	67	56	205
94	ノボロギク	〃	12	28	108	49	197
95	ムラサキツメクサ	〃	12	114	34	28	188
96	ヨウシュヤマゴボウ	〃	50	35	51	52	188
97	シロツメクサ	〃	26	72	47	37	182
98	ハルジオン	〃	29	44	66	39	178
99	オオイヌノフグリ	〃	14	52	67	38	171
100	アメリカフウロ	〃	14	56	47	50	167
101	オランダミミナグサ	〃	8	32	51	46	137
102	ナガミヒナゲシ	〃	4	26	27	58	115
103	ククイモ	〃	4	51	38	18	111
104	ヒメオドリコソウ	〃	9	28	28	20	85
105	アメリカイヌホオズキ	〃	11	15	23	24	73
106	アレチギシギシ	〃	6	34	23	10	73
107	コニシキソウ	〃	11	19	19	23	72
108	コハコベ	〃	15	10	30	12	67
109	ムラサキカタバミ	〃	11	16	12	28	67
110	オオアレチノギク	〃	5	18	14	29	66
111	マメゲンバイナズナ	〃	4	21	14	20	59
112	イモカタバミ	〃	4	15	18	19	56
113	オオニシキソウ	〃	3	20	18	9	50
114	ワルナスビ	〃	5	22	17	6	50
115	ホソアオゲイトウ	〃	3	17	17	9	46

表 外来種の環境別報告件数(3)

No	和名	外来種ランク	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計
116	ニワゼキショウ	一般外来種つづき	6	14	6	8	34
117	カキネガラシ	"	1	19	2	10	32
118	チチコグサモドキ	"	3	4	8	17	32
119	アレチノギク	"		1	10	16	27
120	ブタナ	"	3	3	4	16	26
121	ヒルザキツキミソウ	"	1	5	3	16	25
122	ヤセウツボ	"		22	2		24
123	ショカツサイ	"	7	9	2	4	22
124	アカザ	"	1	1	9	9	20
125	セリバヒエンソウ	"	7	13			20
126	ブタクサ	"	6	3	5	6	20
127	ゴウシュウアリタソウ	"		2	12	5	19
128	コスズメガヤ	"	2	1	9	7	19
129	タチイヌノフグリ	"	2	3	8	6	19
130	オシロイバナ	"	1	4	5	5	15
131	キキョウソウ	"		5	3	3	11
132	キバナコスモス	"		5	4	2	11
133	ミチタネツケバナ	"	1	1	2	7	11
134	コシロノセンダングサ	"	1	5	2	2	10
135	ツルマンネングサ	"		5	2	3	10
136	コバンソウ	"			1	8	9
137	ジュズダマ	"	1	4	4		9
138	タチチコグサ	"	1		2	6	9
139	ツボミオオバコ	"	1	5	1	2	9
140	ベニバナボロギク	"	3	1	3	2	9
141	アメリカタカサブロウ	"		3	4	1	8
142	ダンドボロギク	"	5		1	2	8
143	ヒロハホウキギク	"		5	3		8
144	オオニワゼキショウ	"	2	4		1	7
145	コメツブツメクサ	"	1	4		2	7
146	セイヨウアブラナ	"	2	5			7
147	ニラ	"	1	2	2	2	7
148	ヤグルマギク	"		2	2	3	7
149	コメツブウマゴヤシ	"	1	1	2	2	6
150	ゼニアオイ	"		1	5		6
151	タチアオイ	"			5	1	6
152	タマスダレ	"		4		2	6
153	ナガエコミカンソウ	"				6	6
154	ハゼラン	"				6	6
155	ビロードモウズイカ	"		1	2	3	6
156	アオスズメノカタビラ	"	1		1	3	5
157	イチビ	"	3		2		5
158	オオケタデ	"		4	1		5
159	シナガワハギ	"		1	1	3	5
160	トゲチシャ	"			2	3	5
161	ヒレハリソウ	"		3	1	1	5
162	フラサバソウ	"		5			5

表 外来種の環境別報告件数(4)

No	和名	外来種ランク	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計
163	マツバウンラン	一般外来種つき	1		1	3	5
164	メキシコマンネングサ	〃		1		4	5
165	アメリカスミレサイシン	〃	1	1	1	1	4
166	オオアザミ	〃		4			4
167	ツノミナズナ	〃		4			4
168	ヒメコバンソウ	〃	1		1	2	4
169	マルバアメリカアサガオ	〃			4		4
170	ヤクナガイヌムギ	〃		1	1	2	4
171	アメリカキンゴジカ	〃			2	1	3
172	イヌカキネガラシ	〃				3	3
173	イヌコハコベ	〃	1			2	3
174	オオマツヨイグサ	〃		1	2		3
175	コバナキジムシロ	〃			1	2	3
176	ヒメゲンバイナズナ	〃		2		1	3
177	アメリカアゼナ	〃			2		2
178	アリタソウ	〃		2			2
179	アレチニシキソウ	〃			1	1	2
180	オオスズメノカタビラ	〃		2			2
181	オキジムシロ	〃			2		2
182	オランダフウロ	〃		1		1	2
183	キバナムギナデシコ	〃				2	2
184	キンケイギク	〃		1	1		2
185	クルマバザクロソウ	〃			2		2
186	ゲンバイナズナ	〃				2	2
187	ケアリタソウ	〃		2			2
188	ゼニバアオイ	〃			1	1	2
189	センダングサ	〃	1		1		2
190	ヒナゲシ	〃		2			2
191	ヒメキンセンカ	〃				2	2
192	ヒメブタナ	〃				2	2
193	ヒロハノウシノケグサ	〃		2			2
194	ヒロハノレンリソウ	〃				2	2
195	ホソミキンガヤツリ	〃		1		1	2
196	マカラスムギ	〃		1	1		2
197	マツヨイグサ	〃		1		1	2
198	ヨコハママンネングサ	〃				2	2
199	アイオオアカウキクサ	〃		1			1
200	アメリカアリタソウ	〃		1			1
201	イヌコモチナデシコ	〃		1			1
202	ウスベニチチコグサ	〃			1		1
203	オオアマナ	〃	1				1
204	オトメフウロ	〃	1				1
205	オノマンネングサ	〃				1	1
206	オランダハッカ	〃			1		1
207	カナリークサヨシ	〃		1			1
208	カラクサナズナ	〃				1	1
209	カラスノチャヒキ	〃		1			1

表 外来種の環境別報告件数(5)

No	和名	外来種ランク	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計
210	クスダマツメクサ	一般外来種つづき		1			1
211	ゲンゲ	"		1			1
212	コタネツケバナ	"		1			1
213	シュウカイドウ	"	1				1
214	シロバナシナガワハギ	"			1		1
215	スイセンノウ	"				1	1
216	セイタカハハコグサ	"				1	1
217	セイヨウヒルガオ	"				1	1
218	センナリホオズキ	"			1		1
219	ナンバンカラムシ	"				1	1
220	ニオイタデ	"			1		1
221	ネズミホソムギ	"			1		1
222	ノラニンジン	"	1				1
223	ヒメモロコシ	"			1		1
224	ヒレアザミ	"		1			1
225	フユアオイ	"				1	1
226	ホウキギ	"			1		1
227	ホオズキ	"	1				1
228	ホソバヒメミソハギ	"			1		1
229	ホナガイヌビユ	"			1		1
230	マメカミツレ	"				1	1
231	マルバハッカ	"			1		1
232	ムギクサ	"				1	1
233	ムラサキウンラン	"				1	1
234	ヨーロッパタイトゴメ	"				1	1
235	マグワ	逸出・栽培・植栽	1	10	1		12
236	アブラナ	"		10			10
237	シュロ	"	1		1		2
238	チャノキ	"	1		1		2
239	カジノキ	"		1			1
240	サンシキスミレ	"				1	1
241	ムラサキツユクサ	"	1		2	2	5
242	オランダカイウ	"		1			1
243	ノアサガオ	"				1	1
244	センダン	"	1			2	3
245	ヤツデ	"	1				1
合計			1083	3993	3325	2940	11341

表 外来種の環境別報告件数(6)

(2)種別調査結果

次ページ以降、種別に調査結果を記述する。ただし、報告件数の少ない種については、個別の記述は割愛した。これらについては、次年度以降データを蓄積して記述することとしたい。ただしナルトサワギクは報告件数がごくわずかであるが、特定外来生物で埼玉県初記録となるので例外的に記述した。

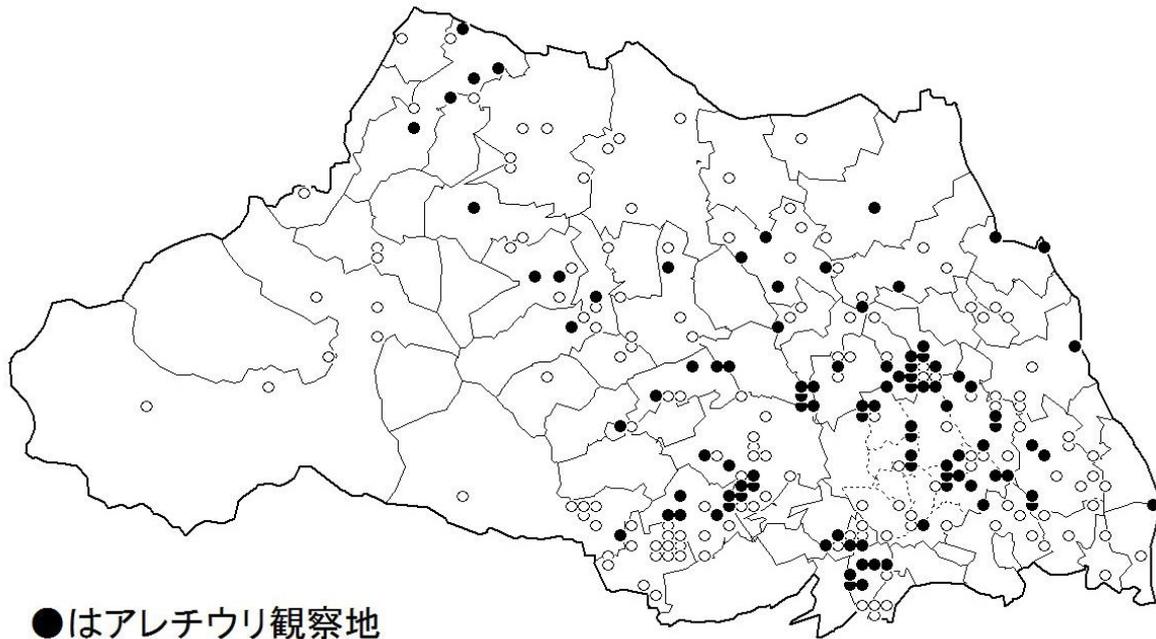
記述の内容は、今年度は原則として環境別報告件数について解説し、生活段階及び群落の大きさ・広がりについては、今年度は触れず、2年目3年目においてデータを蓄積した段階で記述することとしたい。

記述の順は、ランク順、和名順になっている。記述した種は次の42種である。

(ランク順、和名順)

No	APG科名	和名	ランク	順位	ページ
1	(ウリ科)	アレチウリ	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物 10
2	(オオバコ科)	オオカワヂシャ	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物 11
3	(キク科)	オオキンケイギク	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物 12
4	(アリノトウグサ科)	オオフサモ	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物 13
5	(キク科)	ミスヒマワリ	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物 14
6	(ヒルガオ科)	アメリカアサガオ	重点対策外来種	1位	植物 15
7	(キク科)	オオアワダチソウ	重点対策外来種	1位	植物 16
8	(キク科)	オオブタクサ	重点対策外来種	1位	植物 17
9	(アブラナ科)	オランダガラシ	重点対策外来種	1位	植物 18
10	(アヤメ科)	キショウブ	重点対策外来種	1位	植物 19
11	(アカバナ科)	コマツヨイグサ	重点対策外来種	1位	植物 20
12	(イネ科)	シナダレスズメガヤ	重点対策外来種	1位	植物 21
13	(キク科)	セイタカアワダチソウ	重点対策外来種	1位	植物 22
14	(キク科)	セイヨウタンポポ	重点対策外来種	1位	植物 23
15	(ニガキ科)	ニワウルシ	重点対策外来種	1位	植物 24
16	(ツユクサ科)	ノハカタカラクサ	重点対策外来種	1位	植物 25
17	(スベリヒユ科)	ヒメまつバボタン	重点対策外来種	1位	植物 26
18	(ミズアオイ科)	ホテイアオイ	重点対策外来種	1位	植物 27
19	(ヒルガオ科)	マメアサガオ	重点対策外来種	1位	植物 28
20	(ヒルガオ科)	マルバルコウ	重点対策外来種	1位	植物 29
21	(カヤツリグサ科)	メリケンガヤツリ	重点対策外来種	1位	植物 30
22	(キク科)	アメリカオニアザミ	その他の総合対策外来種	1位	植物 31
23	(キク科)	アメリカセンダングサ	その他の総合対策外来種	1位	植物 32
24	(マメ科)	アレチヌスビトハギ	その他の総合対策外来種	1位	植物 33
25	(タデ科)	エゾノギンギシ	その他の総合対策外来種	1位	植物 34
26	(キク科)	オオオナモミ	その他の総合対策外来種	1位	植物 35
27	(イネ科)	シマスズメノヒエ	その他の総合対策外来種	1位	植物 36
28	(イネ科)	セイバンモロコシ	その他の総合対策外来種	1位	植物 37
29	(アブラナ科)	セイヨウカラシナ	その他の総合対策外来種	1位	植物 38
30	(ユリ科)	タカサゴユリ	その他の総合対策外来種	1位	植物 39
31	(タデ科)	ナガバギシギシ	その他の総合対策外来種	1位	植物 40
32	(キク科)	ハルシャギク	その他の総合対策外来種	1位	植物 41
33	(キク科)	ヒメジョオン	その他の総合対策外来種	1位	植物 42
34	(タデ科)	ヒメツルソバ	その他の総合対策外来種	1位	植物 43
35	(ナデシコ科)	ムシトリナデシコ	その他の総合対策外来種	1位	植物 44
36	(イネ科)	メリケンカルカヤ	その他の総合対策外来種	1位	植物 45
37	(イネ科)	カモガヤ	産業管理外来種	1位	植物 46
38	(マメ科)	ナヨクサフジ	産業管理外来種	1位	植物 47
39	(イネ科)	ネズミムギ	産業管理外来種	1位	植物 48
40	(マメ科)	ハリエンジュ	産業管理外来種	1位	植物 49
41	(イネ科)	ホソムギ	産業管理外来種	1位	植物 50
42	(キク科)	ナルトサワギク	特定外来生物・緊急対策外来種	3位	植物 51

1 アレチウリ(ウリ科) *Sicyos angulatus* 特定外来生物・緊急対策外来種



分布状況 今回の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北で確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父地方山岳地帯は少ないものの、ほぼ県内全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査においてもほぼ全域分布となっている。

環境別報告件数 174 件の報告があった。生育地は河川敷が圧倒的に多く 77.6% を占める。河川敷に広がったアレチウリは他の植物を完全に被陰する。次いで水田・休耕田・畑、雑木林、市街地の順となる。

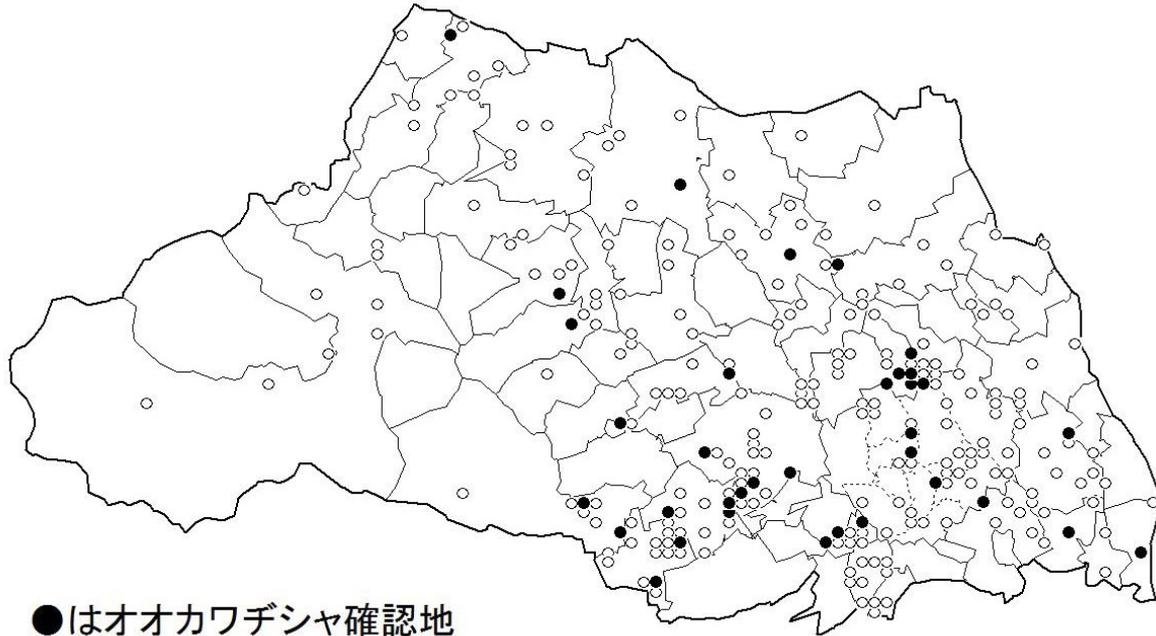
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	7	4
河川敷	B	135	77.6
水田・休耕田・畑	C	29	16.7
市街地	D	3	1.7
合計		174	100

種の概要 つるや巻きひげで他物に絡まる。花は黄白色。果実には長い毛がはえている。河原の泥地や土手に広がり、他の草本を完全に覆い隠す大群落となり、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害をもたらす可能性が高いという。在来種

を被圧することは大いにあり得るが具体的情報がない。人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼすという。スイカ畑の近くにアレチウリが生育していた場合、スイカ果実汚斑細菌病の伝染源になる可能性があるというが、その事例はまだ聞いていない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、初出は 1952 年、静岡県で見いだされた。埼玉県の初出は 1972 年、川越市で珍しい帰化植物として記録された。その後生育地はしばらく間、県内に散在する程度であったが、次第に分布域を拡げた。立証する十分な調査データはないが、現在もとどまることなく拡大を続けているものと考えられる。当該種は多くの光を要求する種で、あらゆるものを覆って広がる。覆われた一般野生植物や一般作物はその勢いが急速に減衰し、開花や結実に至ることなく枯死する例が多い。さらに調査を続行し、精度の高いデータを取得し、その実態をもとに駆除等の具体的方策を検討する必要がある。

2 オオカワヂシャ(オオバコ科) *Veronica anagallis-aquatica* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はオオカワヂシャ確認地



分布状況 今回の調査では大宮台地、荒川西台地、丘陵南で広く確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父・寄居・川本・熊谷・吹上・上尾・戸田、すなわち荒川沿いのみであった。県レッドデータブック 2011 の調査によれば入間郡一帯、利根川沿いでも確認された。

環境別報告件数 今回の調査では 43 件の報告があった。河川敷の報告が圧倒的で 88.4% を占める。残りは水田・休耕田・畑であり、本種は水辺の植物としての特性をもつ。

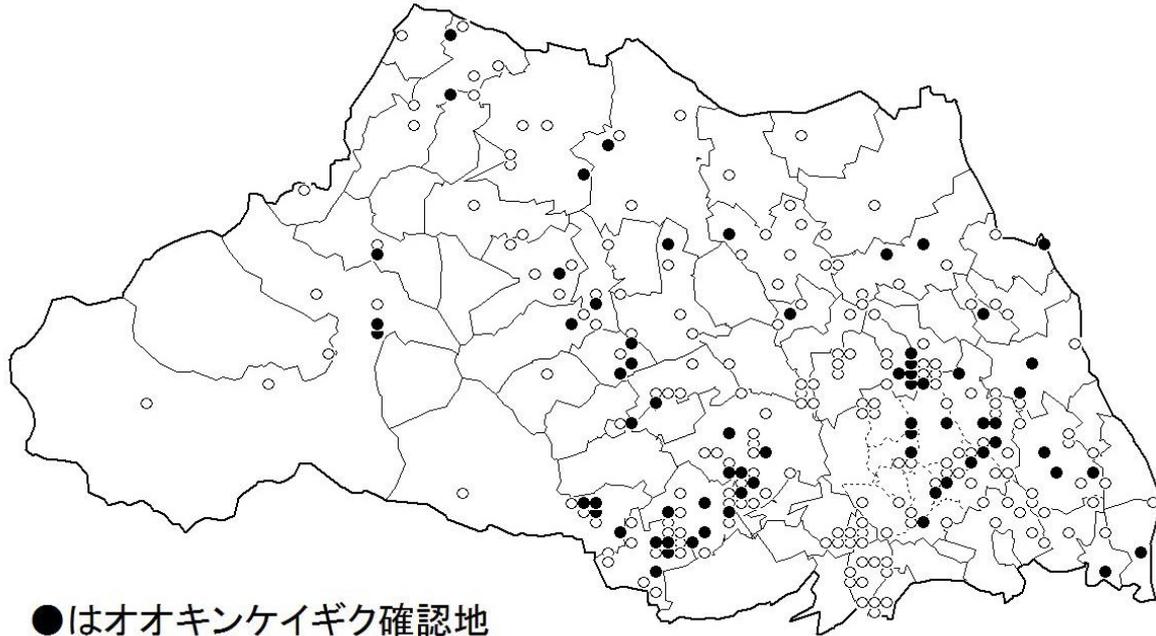
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	38	88.4
水田・休耕田・畑	C	3	7
市街地	D	2	4.7
合計		43	100.1

種の概要 在来種のカワヂシャと混生することが多い。カワヂシャにくらべ、本種は大柄で目立ち、花の色彩も淡青色でメリハリがある。生活段階としては、成葉の状態は 3-10 月にみられる。つぼみ 4-6 月、開花 4-6 月、結実 5-6 月で、時期が重なりみな同時進行の形となる。生物多様性を保全

するうえで重要となる地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いとされるが、現時点ではその事例を聞かない。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いというが、その事例はカワヂシャとの混生であろう。しかし、両者は混生していてもカワヂシャが圧迫されているという感じはない。両種の雑種ができるのではないかと、いわゆる遺伝子攪乱が懸念されているが、今のところ雑種の確認はなされていない。

当該種の消長 初記録は 1867 年、神奈川県記録がある。侵入経路等のいきさつは明らかでない。埼玉では 1998 年時点で荒川沿いに確認され、その後 20 年間に全県的な広がりを見せたと考えられる。それは県のレッドデータブック 2011 の調査からも裏付けられる。今回の調査では利根川沿いの市町村や、秩父児玉地域の報告はごくわずかであった。さらに調査すれば県内全域に生育しているといえるようになると思われる。

3 オオキンケイギク(キク科) *Coreopsis lanceolata* 特定外来生物・緊急対策外来種



分布状況 今回の調査で本種は県全域に分布することがはっきりした。細かく見れば県南部の都県境、利根川沿いの報告は少ない。埼玉県植物誌 1998 によれば秩父・両神・朝霞の限定的分布であった。県レッドデータブック 2011 の調査によれば比企郡と利根川沿いを除きほぼ県の全域で確認された。総合すれば利根川沿いにはあまり分布していないということになる。

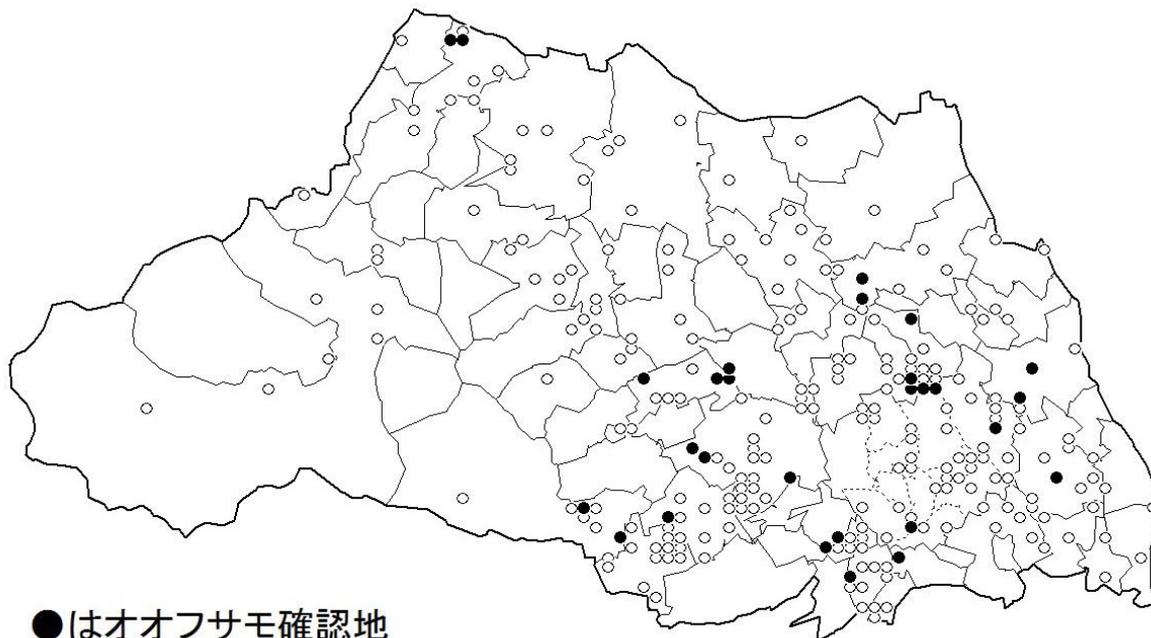
環境別報告件数 92 件の報告があった。最も多い報告件数は水田・休耕田・畑であった。しかし僅差で河川敷や市街地にも分布を広げており、環境を選ばない傾向が強い。ただし、雑木林は例外のようでほとんど現れない。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	1.1
河川敷	B	31	33.7
水田・休耕田・畑	C	32	34.8
市街地	D	28	30.4
合計		92	100

種の概要 黄色の大きな花が咲くのでよく目立つ。つぼみと開花と結実は同時で5月から7月に集中する。子世代は8月ころから始まる。落ちた種子が発芽し、偽ロゼットになり、一部は茎を立ち上げこのまま越冬する。したがって本種の生活史は約1年半の長さになる。全体の感じはハルシャギクに似る。花の色は本種が黄色一色であるのに対し、ハルシャギクのそれは黄色と紫褐色がモザイク状となるので明瞭に区別できる。本種の根生葉は長い柄があり大きく1回羽状深裂し、ハルシャギクのそれは細かく2回羽状深裂する。茎葉も類似するが、根生葉と同様の特徴があり、両者の区別は容易である。絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いというが、本県では絶滅危惧種と競合している実態は不明である。

当該種の消長 明治中期に栽培品として導入されが、その後逸出して野生化し、現状は無管理状態になっている。県内では1998年代に限定的な分布であったが、その後急激に分布範囲を広げ2011年代には全県分布となった。今回の調査は引き続き全県分布を維持している。増減について調査員の感触によれば「変わらず」が圧倒的に多い。「やや減少」と「やや増加」の少数意見は拮抗している。本県では安定状態に達していると考えてよいかもしれない。

4 オオフサモ(アリトウグサ科) *Myriophyllum aquaticum* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はオオフサモ確認地



分布状況 今回の調査では加須・中川低地南東部、大宮台地、荒川西台地、丘陵南の地域から報告があった。丘陵北もわずかに報告がある。埼玉県植物誌 1998 によれば庄和・岩槻・八潮の限定的分布であった。県レッドデータブック 2011 の調査で羽生・鷲宮・菖蒲・上尾・川越・狭山・飯能での確認が加わった。

環境別報告件数 今回の報告件数は 45 件であった。河川敷の報告が圧倒的で 88.9%を占める。水田・休耕田・畑、市街地にも報告があるが、いずれも水路沿いである。

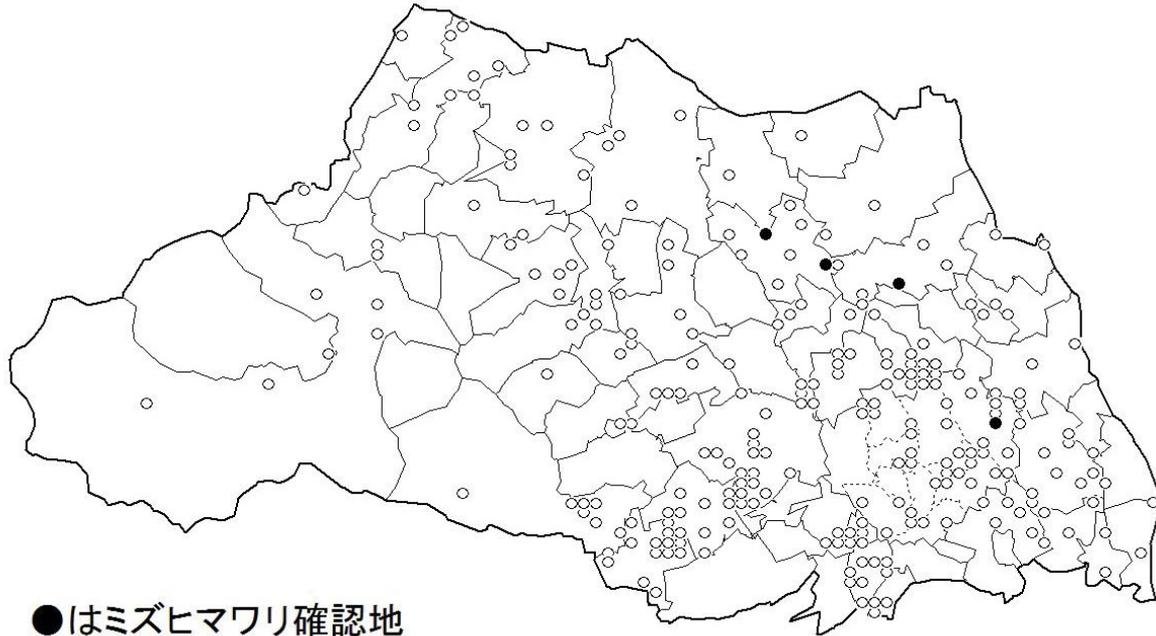
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	40	88.9
水田・休耕田・畑	C	5	11.1
市街地	D	0	0
合計		45	100

種の概要 水辺の植物である。中小河川や湖沼の縁に繁茂する。水流の緩やかなところに広がる傾向はミズヒマワリなどとよく似ている。生活段階について、幼植物をみることはない。成葉だけの状態が通年みられる。本種は年間を通して花を見ることはまれである。国内は雌株のみといわれる。絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされ、県内ではコウホネ(県準絶滅危惧種)との競合の実態がある。現地では、両者が1本1本入り混じった混生状態にあり、オオフサモだけをそっくり取り除くことは難しい。どのような駆除方法をとれば最も効果的なのか現在検討が続いている。オオフサモの駆除についてはその手法が開発されているというが、事例ごとに適用できるか試行してみる必要がある。

当該種の消長 大正時代に観賞用の水草として導入されたが、逸出し全国的に野生化したという。埼玉県では 1998 年代ごく限定的であったが、その後急激に分布を広げたといえる。2010 年ころは、遠目にきれいに見えることから移植し栽培している事例も見受けられ、まだ珍しい存在であった。

現在、県北部や秩父地域では報告がほとんどないので、まだ分布していないという方がいい方が妥当だろう。しかし本庄で1件の報告があるので、調査不足の要素も否定しきれない。

5 ミズヒマワリ(キク科) *Gymnocoronis spilanthoides* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はミズヒマワリ確認地



分布状況 今回の調査では現段階でわずかに 7 件の報告があるのみである。鴻巣市 2 件、岩槻区 4 件、白岡市 1 件である。埼玉県植物誌 1998 によれば県北部の本庄・熊谷・妻沼と、県東部の蓮田・岩槻区で記録がある。さらに県レッドデータブック 2011 の調査では熊谷・久喜・幸手・宮代で確認されている。全部まとめると高崎線以北以東に分布していることになる。

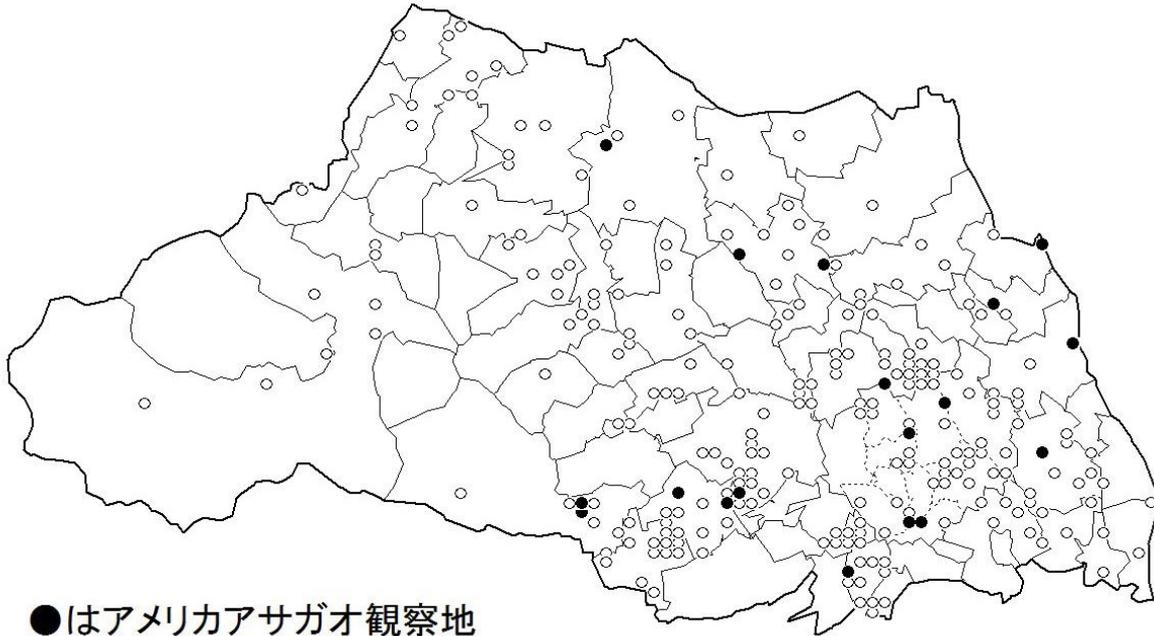
環境別報告件数 報告件数 7 件であり、データ不足は否めないが、河川敷に多く分布するものと思われる。川沿いに普通に生育していると考えられるので、さらに河川を中心とした調査が欠かせない。今回の調査は河川を定めた調査ではないので、調査すべき場所が相当数抜けていると考える。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	6	85.7
水田・休耕田・畑	C	1	14.3
市街地	D	0	0
合計		7	100

種の概要 河川・池沼の端に多く生育する。生活段階としては、種子から芽生える幼植物を見つけるのは困難で、もともとあった親株から茎を横に伸ばし、葉だけが 3-11 月の長期間にわたって観察できる。つぼみと開花は 8-11 月に確認できる。生育上の特徴として、茎の切れ端が流れてどこかで停滞すると、またたくまに発根し定着する。また葉や茎の成長はきわめて早く、浅瀬では水面を覆うように広がっていく。とくに流水の弱いところではその成長が著しい。

当該種の消長 1995 年、豊橋市の河川に定着したのが最初の確認とされる。その後関東から近畿まで太平洋沿岸に分布が拡大している。しかし、埼玉県では報告が多くない。2006 年、県内で発見され当初ヌマダイコンではないかと疑われたが、その後の精査で本種と確認された。現段階で分布は限定的であるといわざるを得ないが、調査が進めば県北部利根川沿い、元荒川沿い、大落古利根川沿いに広く分布している実態が明らかになるとと思われる。

6 アメリカアサガオ(ヒルガオ科) *Ipomoea hederacea* 重点対策外来種



●はアメリカアサガオ観察地



分布状況 今回の調査では確認件数が少ないものの丘陵帯南北以東の全域で確認された。埼玉県植物誌1998の記録によれば児玉郡一帯・行田・羽生・加須、及び川越・見沼区・緑区で記録がある。埼玉県植物誌1998 発刊以後、秩父・熊谷・三郷が追加された。県レッドデータ 2011 の調査で入間・幸手・越谷・草加が記録された。総合すれば県全域に分布していることになる。



環境別報告件数 報告件数が少なく環境別の傾向を述べることはできないが、雑木林以外のいろいろな環境で他物に絡み、這い上がっていると考えられる。

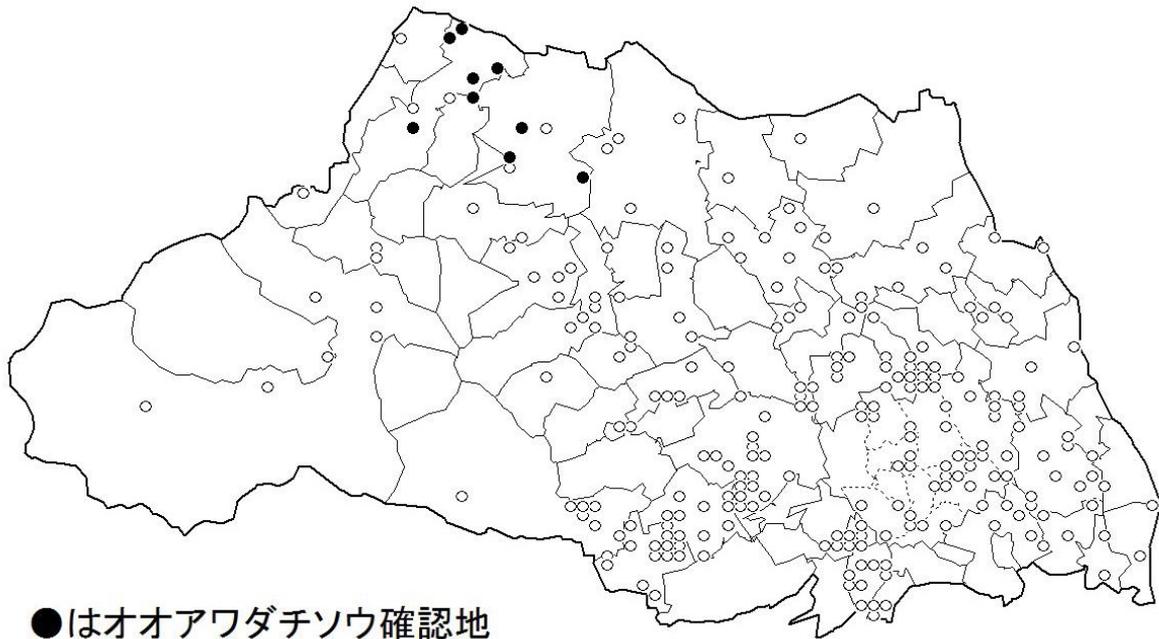
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	6	33.3
水田・休耕田・畑	C	3	16.7
市街地	D	9	50
合計		18	100

種の概要 日向を好み、絡みつくものをみな覆い隠してしまう。がく片は鋭尖頭で1本の花柄に花が1-3個つくことはアサガオと同じだが、がく片の先端が半曲

するところが本種の特徴となる。葉の形はアサガオにくらべると切れ込みが強い。競合などの生態系被害による影響が大きく、分布の拡大や拡散の可能性が高いといわれているが、本県ではいまのところその兆候は感じられない。調査の実態が明らかになるにつれて適切な評価ができるようになるだろう。

当該種の消長 日本への導入は観賞用として江戸時代に持ち込まれたとある。戦後、輸入食料品に混じって侵入したともいう。現在は全国的に分布しているが埼玉への定着ははっきりしない。1998年時点で件数は少ないが県内に広く分布していたようである。今回の調査結果が実態なら減少しているという表現も可能になる。

7 オオアワダチソウ(キク科) *Solidago gigantea* subsp. *serotina* 重点対策外来種



●はオオアワダチソウ確認地



分布状況 今回の調査では、県北の本庄・深谷・美里で確認された。埼玉県植物誌 1998 によれば県西部にはやや少ないもののほぼ県全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査で鷲宮・川越・上尾・中央区・桜区・八潮で観察された。

環境別報告件数 13 件の報告があった。多くみられる環境は雑木林と水田・休耕地・畑の環境である。市街地では確認されていない。データをもう少し多く集める必要がある。

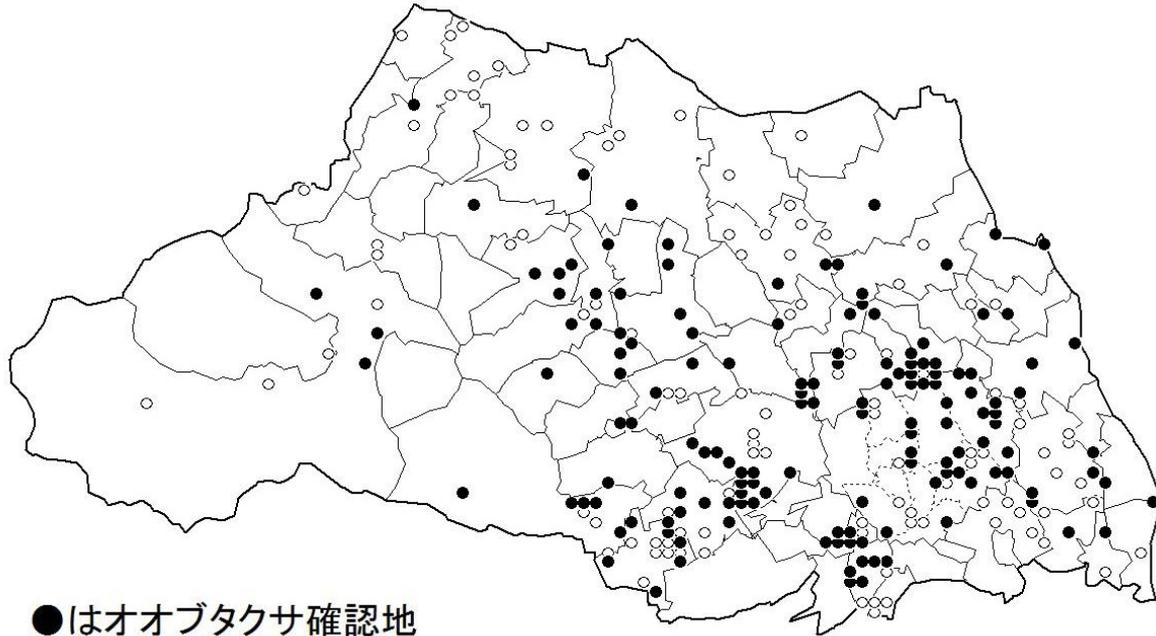
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	38.5
河川敷	B	3	23.1
水田・休耕地・畑	C	5	38.5
市街地	D	0	0
合計		13	100.1

種の概要 茎や葉の形状や花の様子がセイタカアワダチソウに酷似する。しかし本種の花期は 7-9 月であり、セイタカアワダチソウの 10-11 月開花と比べると開花期が

重なることはないの見まちがうことはない。狂い咲きの可能性を心配するなら、本種は茎の毛がほとんどないこと、舌状花の雌しべがごく短いことを確認すれば本種であることが確定できる。しかし実際は、オオアワダチソウをセイタカアワダチソウと誤解している場合が多々考えられ、オオアワダチソウのデータがセイタカアワダチソウの中に混じり込んでいる可能性がある。生物多様性の保全上重要な地域で問題になる可能性が高いというが、本県にそのような地域はないと見る。また、生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性が高いとも言われるが、本県では該当しないように思われる。

当該種の消長 もともとは明治時代に観賞用として持ち込まれたものである。その後、全国的に野生化したと考えられる。本県では 1998 年以前において県内に広く分布していたが、今回の調査ではごくわずかな報告しかなかった。調査年ごとに分布が狭まっている。このことから本種は減少しているとみるのが妥当なのであろうか。今後の報告を待ちたい。

8 オオブタクサ(キク科) *Ambrosia trifida* 重点対策外来種



分布状況 今回の調査ではほぼ全県分布であるが、県北部と秩父地域の観察点がもう少し多いと全県分布がより鮮明になるのではないかと思う。埼玉県植物誌 1998 によればほぼ県全域に分布していた。県レッドデータブック 2011 の調査もそれを裏付けるものであった。

環境別報告件数 報告件数は 275 件であった。最も報告件数の多い環境は河川敷 45.5%である。次いで水田・休耕田・畑 29.8%、雑木林 14.5%の順である。環境を選ばないで広範囲に

分布している。

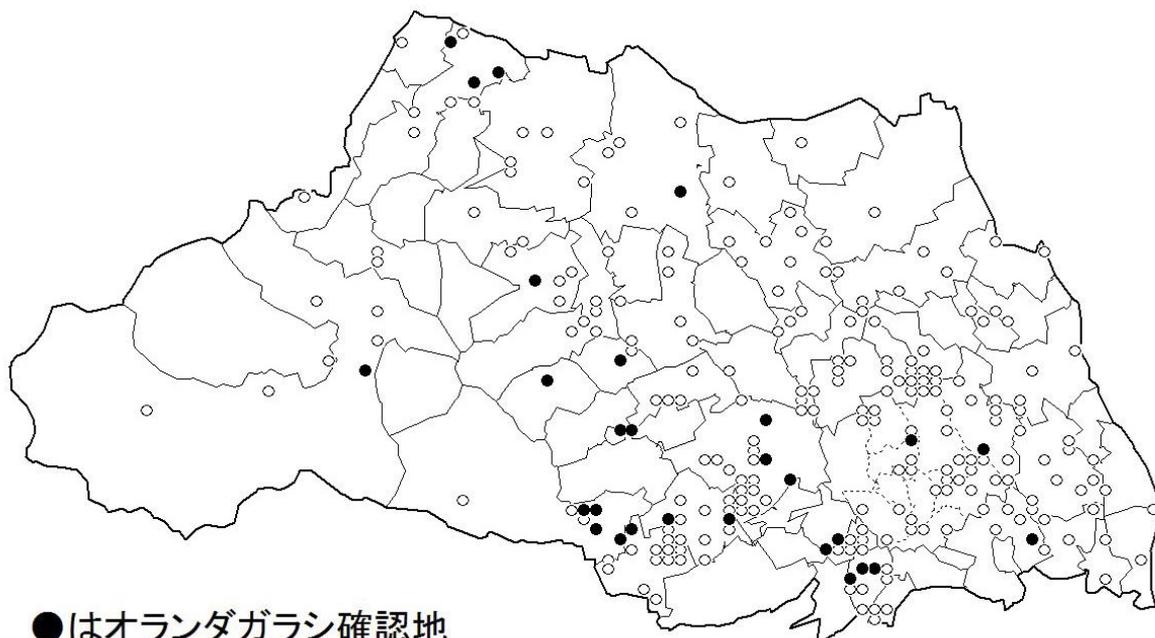
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	40	14.5
河川敷	B	125	45.5
水田・休耕田・畑	C	82	29.8
市街地	D	28	10.2
合計		275	100

種の概要 幼植物は 4 月に確認されている。5 月には急激に成長し始め 8 月まで成長を続ける。つぼみは 8-9 月、開花は 8-9 月、結実は 9-10 月となる。つぼみと開花と結実の時期は同時進行で重なりが強い。近縁種にブタクサがある。

開花時期の花の様子はよく似ている。しかし葉の形が全くちがうので見まちがうことはない。ただし本種の葉の裂け方は一定でなく、裂けない葉もあり、3 裂・7 裂の葉もあり多様である。一枚の葉に注目せず植物体全体から葉の特徴を把握する必要がある。生態系に被害をもたらす可能性が高いとされ、特に絶滅危惧種の生育に甚大な被害をもたらす可能性が高いとされる。

当該種の消長 「日本帰化植物図鑑」によれば、本種は関東地方において 1953 年に見つかったのが最初である。本県においては、1998 年以前から徐々に分布の拡大を続けてきたが、最近の増減に対する評価は、「変わらず」とする調査員が多い。とりあえずは安定・定着段階に達したとみることもできる。本種はブタクサの侵入よりも後発で広まると記憶するが、すでにブタクサを凌駕している。ブタクサはときどき見かける程度である。オオブタクサの優占した場所は明らかに在来種の分布域を狭めており、何らかの人為による駆除等の対策を考える時期に来ている。

9 オランダガラシ(アブラナ科) *Nasturtium officinale* 重点対策外来種



●はオランダガラシ確認地



分布状況 今回の調査では丘陵北、丘陵南、荒川西台地、大宮台地から報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば利根川・江戸川水系と荒川水系に広く分布している。県レッドデータブック 2011 の調査においても同様の分布状況であった。今回の調査は全体的に調査不足の感がある。

環境別報告件数 河川敷の報告が圧倒的に多く 58.8% を占める。河川敷の浅瀬を埋め尽くすように広がる様子をよく見かける。本種は水辺環境を必要とし、水辺があればどこにでも生育し

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	11.8
河川敷	B	20	58.8
水田・休耕田・畑	C	5	14.7
市街地	D	5	14.7
合計		34	100

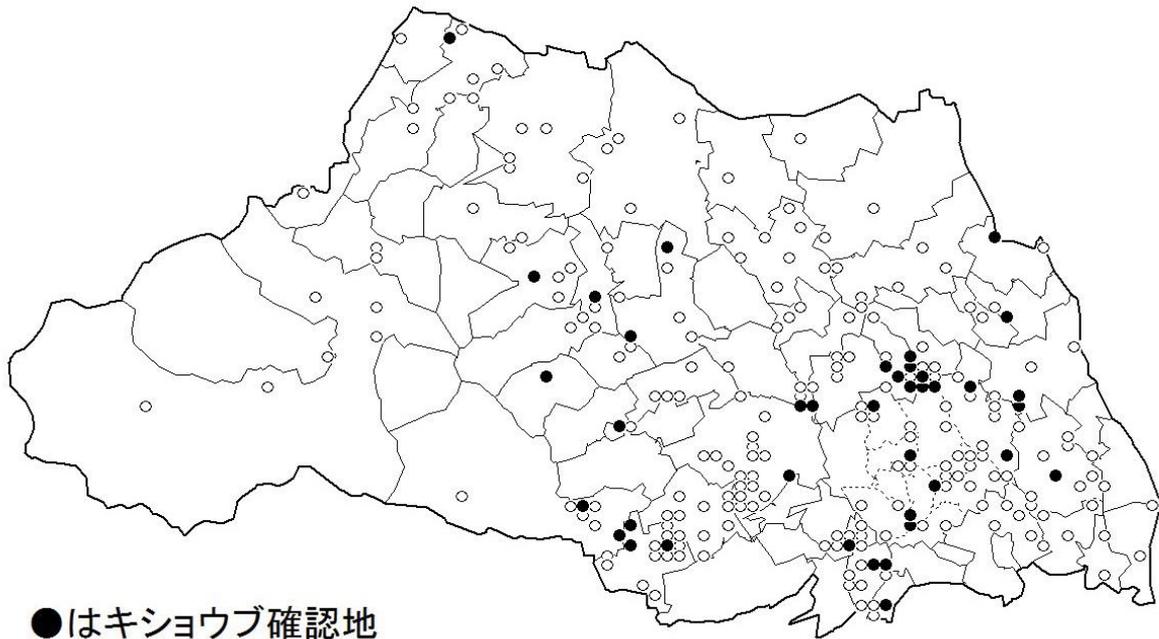
ている。

種の概要 流水の縁に群生し、茎の下部は横に這い盛んに分岐する。春から夏、白の十字形花がつく。他のアブラナ科の植物にくらべて、果実に 2 稜があり、熟してもはじけない。茎や葉に毛がない。年間を通して成葉はい

つでも見られる。開花は 4-9 月、結実は 5-11 月となる。季節感の乏しい植物といえる。生態系の被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えているというが、その実態がはっきりしない。さらに調査を進める必要がある。外来種問題として課題を挙げるなら繁茂して水流を抑制する点があり、浮遊物質をはやく沈殿させ河床を浅くする影響をもたらすことは十分にあり得る。

当該種の消長 明治時代、西洋料理の添え物として導入されたものが全国各地に広がった。水辺の環境があればどこにでも生育する。富栄養化した水質にも強い。渓谷といえども生育する。食用にする場合はクレソンという名で流通するが、現在野生状態の本種を採取して食料とする習慣はほとんどなくなっている。調査が進めば県全域に分布している実態が浮かんでくるのではないかと推測する。2003-2013 年にモニタリング調査を実施した際、増減について、調査員の感触は「変わらず」が 76% で、「やや増加」が 14%、「やや減少」が 9% であった。ほぼ定着しているとみてよいだろう。

10 キショウブ(アヤメ科) *Iris pseudacorus* 重点対策外来種



分布状況 今回の調査では加須・中川低地の東南部、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北の報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、山地帯・亜高山帯を除き県内全域に分布する。県レッドデータブック 2011 の調査では上記植物誌の分布を補完するものであった。今回の調査が進めば、県北部や秩父地域の分布がさらに明らかになるものと考えられる。

環境別報告件数 60 件の報告があった。河川敷が最も多く 48.3%であった。次いで水田・休耕田・畑 25.0%、市街地 15.0%と続く。本種の生育には水辺を必要とし、雑木林は水辺と隣接するところに自生する。

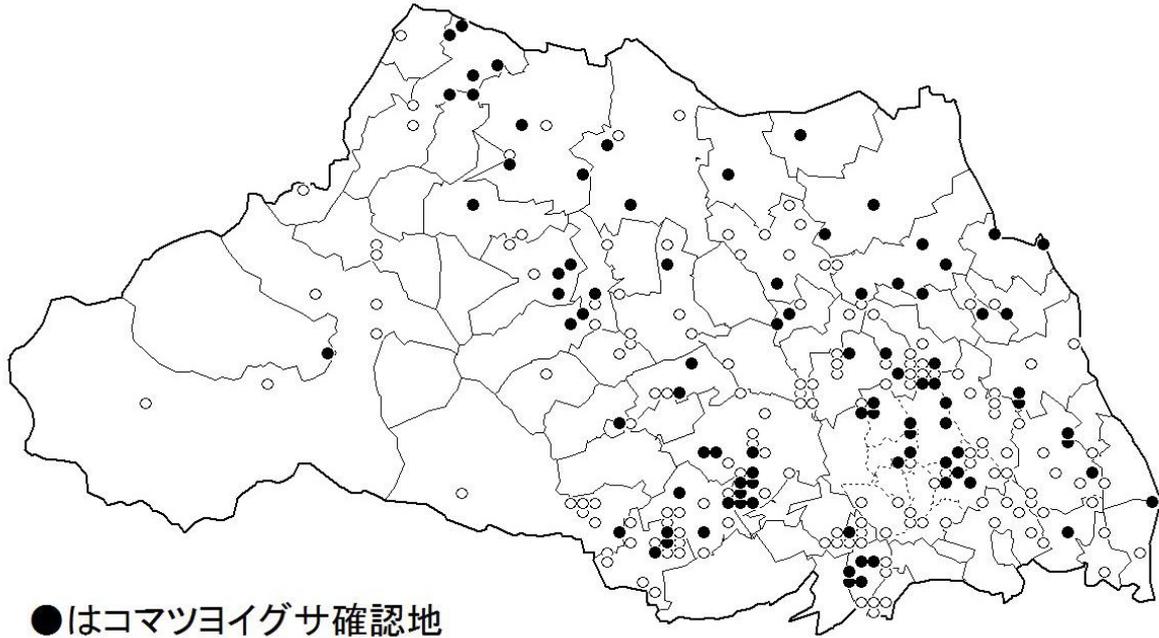
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	7	11.7
河川敷	B	29	48.3
水田・休耕田・畑	C	15	25
市街地	D	9	15
合計		60	100

種の概要 花はアヤメに似て鮮やかな黄色。水辺に群生。開花期に花被片が黄色であれば迷うことなくキショウブといえる。成長期や結実期は葉で区別しなければならない。

しかし他のアヤメ類と区別は困難である。強いていえばキショウブの葉の中脈は太くて目立つ。これに対してカキツバタやアヤメの中脈は細くて目立たない。成葉はいつでもあり、5 月はつぼみができ、開花は5月と6月となる。開花期間はあまり長くない。6月からは結実し果実は9月までついている。生物多様性を保全する上で重要な地域に侵入し、定着して被害をもたらす可能性が高いといわれるが、本県ではまだ該当例を聞いていない。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとも聞くが、この該当例も今のところ聞いていない。

当該種の消長 明治末に花卉として導入された。ハナショウブ類は青～ピンク系統であったので黄色のキショウブは高く評価されたい。やがて栽培株が逸出し野生化するようになった。本県では1998 年代すでに全県的分布であった。増減について調査員の感触は「変わらず」が最も多く7割弱を占める。全体としては変動なしである。侵略的傾向はほとんど認められない。県内では安定的に定着していると考えてよい。

11 コマツヨイグサ(アカバナ科) *Oenothera laciniata* 重点対策外来種



分布状況 今回の調査ではほぼ県全域に分布することが明らかになった。埼玉県植物誌 1998 によれば、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵北、丘陵南に分布、ただし比企郡には記録がない。県レッドデータブック 2011 の調査では県南部の全域に生育を確認した。

環境別報告件数 報告件数は 134 件であった。環境別に河川敷 35.1%、水田・休耕田・畑 26.1%、市街地 29.9%、雑木林の順になるが、ほとんど僅差である。環境を選ばずどこにでも出現する。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	12	9
河川敷	B	47	35.1
水田・休耕田・畑	C	35	26.1
市街地	D	40	29.9
合計		134	100.1

種の概要 日当たりのよい道ばたのような環境に這うように広がる。多少斜上する場合もあるが直立することはない。近縁種メマツヨイグサ(アレチマツヨイグサ)の茎は直立する。本種の葉の縁は羽状に浅く切れ込み波打つ。生物多様性を保全する上で重要な地域に侵入し、定着して被害をもたらす可能性が高いといわれるが、本種に関してこの事実に合う事例は聞いていない。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとも聞くが、本県の絶滅危惧種は一般にやや半日陰の環境に分布することが多く、本種のようにきわめて日当たりのよいところに生育する種とは分布が重ならないように思われる。したがって、この該当例も今のところ聞いていない。コマツヨイグサが鳥取砂丘を狭めようとする動きが外来種問題として取り上げられているようだが本県にそのような事例はない。

当該種の消長 1910 年代(明治末期)に侵入したといわれている。本県では 1998 年代において平地や台地に多く分布し、丘陵帯や山地帯ではあまり見られない状況だった。この状況は現在も維持されているのではないかとと思われる。しかし山間部も調査し、実態を正しく把握しておく必要がある。

12 シナダレスズメガヤ(イネ科) *Eragrostis curvula* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、本庄・深谷・滑川・嵐山・東松山・川越・狭山・入間・飯能など、県の南北軸に沿う一帯で報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父地域・県北部・県東部に記録があり、自動車道に砂防用として植栽したものが逸出したものである。県レッドデータブック 2011 の調査による分布は、埼玉県植物誌 1998 の分布と重なる。

環境別報告件数 今回の報告件数は 38 件であった。

生育地は河川敷が多く報告の 47.4%を占める。次いで市街地、雑木林、水田・休耕田・畑の順となる。河川敷での報告が多いのは、本種に強い耐暑性と耐旱性があり、日当たりの良い砂地を好む特性によるものと思われる。

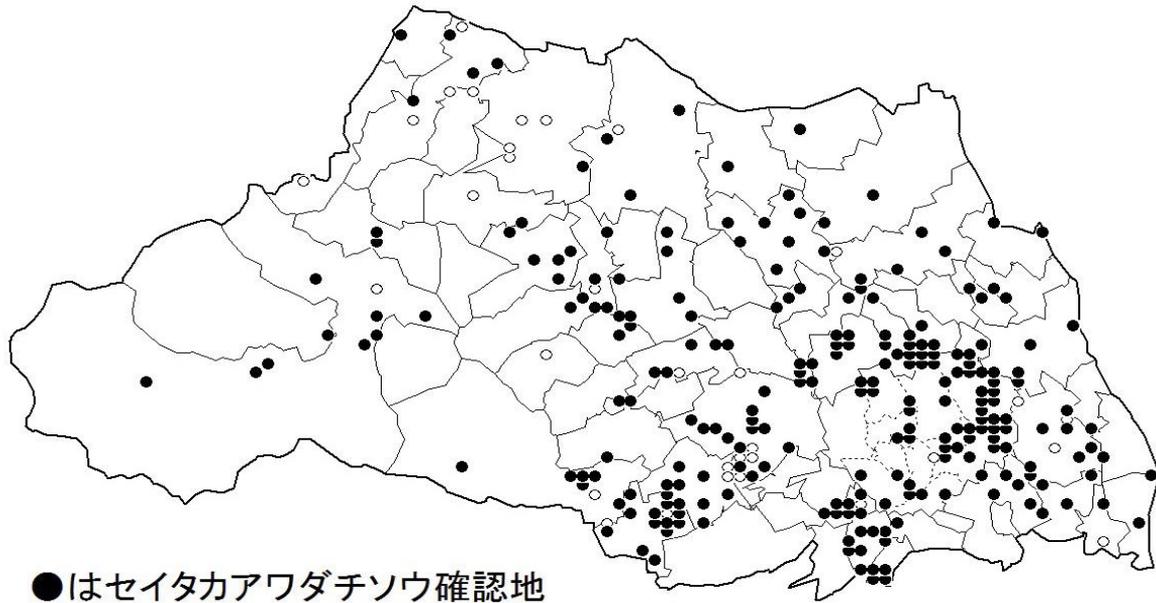
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	10.5
河川敷	B	18	47.4
水田・休耕田・畑	C	4	10.5
市街地	D	12	31.6
合計		38	100

種の概要 茎は高さ 60–120 cm。茎は密に束生、叢生して大きな株を作る。葉幅 2 mmの葉が根本から多数出て、先端が地面に届くほどしなだれているのが特徴。葉鞘の口部に長毛がある。枝の分岐点は膨れて白毛がある。夏、茎の先に長さ 20~40 cmの円錐状の花序を出す。花序は先が傾き、小花はやや紫色を帯びる。生活段階としては、5-11月の長きにわたり、つぼみ、開花、結実が確認される。

絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされているが、絶滅危惧種との競合は現在のところ聞いていない。しかし、近年至る所で目立つ傾向があり、他種との競合は避けられないものと思われる。例えばススキやセイバンモロコシとの競合はあり得る。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、第二次世界大戦前、砂防用に導入し、その後、全国に分布した。埼玉県では県内全域の自動車道に植栽された経緯があるため、県内全域に分布している。今回の調査では今まで記録の少なかった県西部の報告が加わった。県南部や県東部にも分布があるのではないと思われるが不明である。種子生産量がきわめて多く、雨や風によっても伝播されるため、今後ますます広がっていく可能性が高い。さらに精査する必要がある。

13 セイタカアワダチソウ(キク科) *Solidago altissima* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、亜高山帯を除く県全域で分布の確認ができた。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父市大滝を除き、県内全域にまんべんなく分布している。県レッドデータブック 2011 の調査でも同様の分布が確認され定着とみなされている。

環境別報告件数 535 件の報告があった。環境別に見た河川敷の優占度と水田・休耕田・畑の優占度は互いに拮抗し、両者の合計は全体の 65.2%を占めている。次いで市街地、雑木林の順となる。雑木林は比較的少ない。環境を選ばない感があるが、日照は必要のようであった場所があればどこでも見られる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	60	11.2
河川敷	B	192	35.9
水田・休耕田・畑	C	157	29.3
市街地	D	126	23.6
合計		535	100

種の概要 秋、茎の先に大きな円錐花序が開く。類似種にオオアワダチソウがある。しかしオオアワダチソウはあまり見かけない。本種は葉や茎に堅い毛を密生するが、オオアワダチソウの茎はほとんど無毛で表面はなめらかである。本種の花期は晩秋。オオアワダチソウの花期は一足早く 7-9 月となる。

生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いとされる。本県でも蔓延し定着・安定の状態にあり、在来種の生育範囲を明らかに奪った。また絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされるが、その可能性は確かにある。しかし、現在どのような絶滅危惧種と競合しているのか、またはどのような絶滅危惧種を消滅に追いやっているのか、その具体的な事例が不明のままである。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治年間に導入、第二次世界大戦後に温暖地を中心に広く分布を広げた。本県でも、1998 年代、2011 年代、そして今回 2016 年の進行中の調査からいえることは、分布は県全域に広がっており、もはや普通に見られる種として定着している。かつてのような旺盛な分布の拡大はみられないが、引き続きその動向を見定めていく必要がある。今のところ減少傾向は認められない。

14 セイヨウタンポポ(キク科) *Taraxacum officinale* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、県内全域で分布が確認できた。分布図上の観察地点が均一分布をしていないが、これは調査地点のばらつきが反映している。調査地点の設定について検討が必要である。埼玉県植物誌 1998 によれば、県内全域にくまなく分布する。山地帯、亜高山帯も例外ではない。県レッドデータブック 2011 の調査でもほぼ同じ分布を確認している。

環境別報告件数 402 件の報告があった。生育地は市街地が多く報告の 33.3%を占める。次いで水田・休耕田・畑、河川敷、雑木林となる。雑木林以外の環境では、その数値は拮抗しており、環境を選ばない種といえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	46	11.4
河川敷	B	110	27.4
水田・休耕田・畑	C	112	27.9
市街地	D	134	33.3
合計		402	100

種の概要 草丈は通年を通して 5-30 cmで、春夏秋冬あまり変わりはない。土壌によっては相当高くなることもある。本種は総苞外片が反り返るのを大きな特徴とする。在来種

カントウタンポポの総苞外片は反り返らない。両者の交雑種をアイノコセイヨウタンポポというが、この総苞外片は開出するが反り返らない。

本種は生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いとされるが、本県では全域分布の状態が長期間続いており被害の実態は不明のままである。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとも言われるが、その実態も不明のままである。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治の初め北海道に導入された。本県でも 1998 年代、そして 2011 年代において県内全域分布である。今回の調査は進行中ではあるが同様の結果になると予想されている。カントウタンポポは減少傾向にあるが、この現象はセイヨウタンポポの分布が拡大したと連動しているのかどうかは即断できない。ただし最近、カントウタンポポとセイヨウタンポポの交雑種が増え、セイヨウタンポポを凌駕している可能性がある。その結果セイヨウタンポポが減少しているのではないかと懸念されるが、それを立証するデータがない。外来性のタンポポについてはさらにデータを集め精査する必要がある。

15 ニワウルシ(ニガキ科) *Ailanthus altima* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、亜高山、山地帯以外の地域で分布が確認されているが、県南部や利根川沿いはごくわずかの報告しかない。埼玉県植物誌 1998 によれば、ほぼ県内全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査でもほぼ県内全域に分布している。県内には完全に定着しているといえる。

環境別報告件数 今回の報告件数は 87 件であった。生育地は河川敷が最も多く、報告の 35.6% を占める。次いで市街地、雑木林、水田・休耕田・畑が同じ割合で並ぶ。河川敷の優占度が高いのは先駆植物的な特性をよく表している。全般的には環境を選ばないで生育する樹木であるといえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	17	19.5
河川敷	B	31	35.6
水田・休耕田・畑	C	14	16.1
市街地	D	25	28.7
合計		87	99.9

種の概要 高さ 10~20m。葉はウルシに似た大形の奇数羽状複葉で互生する。小葉は 6~12 対あり、長卵形~披針形

で先が細くとがり、基部にある鋸歯の縁には腺点がある。6 月頃枝先に緑白色の小花を多数つける。果実は翼果。中央に扁平な種があり褐色に熟す。風によって散布される。本種の名はウルシの葉に似ていることに由来するもので、かぶれるものではない。別名シンジュともいう。

絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いという。本種は河川敷に多く生育することから絶滅危惧種等との競合はあり得る。しかし、その具体例を聞いていないので予測の範囲を出ることはできない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治 10 年ころ渡来し、庭木街路樹として栽培された。本県では第二次世界大戦中、天蚕(ヤママユガの幼虫)のえさとして県内に広まった。河川敷、空き地などにパイオニア樹種として侵入する。種子の発芽率も良い。また、萌芽更新率も高く、成長も速いため分布を広げているようだ。県内全域分布ではあるが、県内隅々までさらに拡大を続けているのではないかと思われる。さらに精度の高い調査を行ってデータを蓄積し、その実態を明らかにする必要がある。



分布情報 今回の調査では県南部・県東部を中心に報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、熊谷・北本・緑区の3地点ほどの記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査では、今回の調査とほぼ重なり県南部・県東部の分布が確認されている。

環境別報告件数 今回の報告件数は 37 件であった。生育地は市街地が最も多く、報告の 45.9%を占める。河川敷、雑木林が続ぎ、水田・休耕田・畑の順である。もともと園芸品種が逸出して野生化したものなので、市街地に多く見られるのは納得できる。全体としてみれば環境を選ばない種といえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	8	21.6
河川敷	B	8	21.6
水田・休耕田・畑	C	4	10.8
市街地	D	17	45.9
合計		37	99.9

種の概要 茎は良く分岐して地を這い、節から根を出して広がり、長さ 1 m 以上になる。葉は先が尖った卵形で基部は葉鞘となる。夏、茎の頂に直径 1 cm 程の白い 3 弁の花を

数個ずつつける。3 枚の花弁は同形同大である。別名はトキワツユクサというが、これは葉が常緑であることに由来する。

絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いといわれるが、本県では今現在被害の事例を聞いていない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、昭和年間の初期に葉に白斑の入った園芸品種が観賞用に導入され温暖地で逸出した。本県では埼玉県植物誌 1998 ではわずかな記録しかなく、その後、県レッドデータブック 2011 の調査で県南部・県東部に広がりを見せていることが確認された。そして今回の報告は、これらの分布記録とほぼ重なる結果になってきており定着した状況を感じ取ることができる。県北部や県西部はどうなのか、実際のところははっきりしない。引き続き調査を続行してデータを取得し、その実態を把握する必要がある。

17 ヒメマツバボタン(スベリヒユ科) *Portulaca pilosa* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では小川・坂戸・川越・入間・春日部・加須で確認された。埼玉県植物誌 1998 によれば、件数は多くないが、秩父地域・県北部・県南部を中心に分布が記録されている。県レッドデータブック 2011 の調査では埼玉県植物誌 1998 とほぼ重なる分布が確認された。

環境別報告件数 今回 7 件が報告された。生育地は市街地がほとんどで、雑木林が 1 件であった。河川敷や水田・休耕田・畑という環境での報告は無い。湿った環境よりは、乾燥した日当たりの良い場所を好む植物であることがわかる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	14.3
河川敷	B	0	0
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	6	85.7
合計		7	100

種の概要 全体多肉質。茎は基部からよく分岐して地を這い、または斜上して長さ 30 cm 程になる。葉は扁平な棒状でやや先が尖り、ほぼ無柄で互生する。葉の基部に、白い縮れた長毛が目立つ。夏、茎の先にマツバボタンに似た 5 弁の花を数個ずつつける。

花は直径 1 cm と、マツバボタンに比べてはるかに小さい。

生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いといわれているが、本県では定着している事例はほとんどなく、むしろややまれな外来植物としての位置づけが妥当である。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いともいわれているが、ヒメマツバボタンと競合する絶滅危惧種の例を聞かない。本種は市街地に出現しており、逆に絶滅危惧種は市街地で生育する例はほとんどない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1960 年代に帰化が知られるようになり、現在では関東地方以西で乾燥した日当たりのよい道端などに発生する。本種は熱帯アメリカ原産であり、その多肉質で棒状の細長い葉をもつという形態を見ても、葉からの蒸散を極力抑えた構造になっており、高温や乾燥に強いことは想像できる。本県の場合、過去のデータを含めても確認数はわずかであり、出現も不安定のところが感じられ、定着していないと考えられる。

18 ホテイアオイ(ミズアオイ科) *Eichhornia crassipes* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、小川・行田・加須・岩槻・さいたま市・越谷・朝霞の報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、本庄・行田・羽生・加須・久喜・杉戸・坂戸での記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査によれば、行田・羽生・川越・上尾・岩槻・越谷で確認されている。

環境別報告件数 今回の報告件数は 16 件であった。河川敷での優占度は高く池沼を伴う河川敷に多い。次いで水田・休耕田・畑、雑木林、市街地となる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	12.5
河川敷	B	11	68.8
水田・休耕田・畑	C	2	12.5
市街地	D	1	6.3
合計		16	100.1

種の概要 多年生の浮遊植物。茎は水中にあり葉を叢生する。葉は長さ 5~15 cm の広い倒卵形で、厚く光沢があり葉柄の基部は丸く膨らみ浮袋の役目をする。この膨らんだ部分を布袋の腹に見立ててこの名がついたという。花期は 8~10 月。高さ 15 cm 程の花茎に淡紫色の花を多数つける。花穂は 1 日で全て開花し、次の日には茎ごと水没する。

根もとからつる枝を出し次々と子株を作り、短期間に大株を形成する。

生物多様性を保全する上で重要な地域に侵入・定着して被害をもたらす可能性が高いというが、本県ではそのような事例は聞かない。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いというが、現時点で絶滅危惧種等との競合の例を聞かない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治中期に観賞用に渡来し、今は南関東、北陸以西にみられ、観賞用として栽培もされるが、暖地では水路の害草として嫌われる。異常繁殖が問題になったのは 1960 年以降。本県では低地の池沼に分布が確認されているが、多く分布しているというほどではない。十分な調査データはないが、水質浄化の作用もあり、緑肥として利用している地域もあるので、現在も拡大を続けているものと考えられる。さらに調査を続行する必要がある。

19 マメアサガオ(ヒルガオ科) *Ipomoea lacunosa* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地で確認された。丘陵地帯にも見られる。埼玉県植物誌 1998 によれば、亜高山、山地帯以外のほぼ県内全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査においてもほぼ県全域での確認がある。

環境別報告件数 今回の報告件数は 56 件であった。生育地は河川敷が 50%、次いで水田・休耕田・畑、市街地、雑木林の順である。

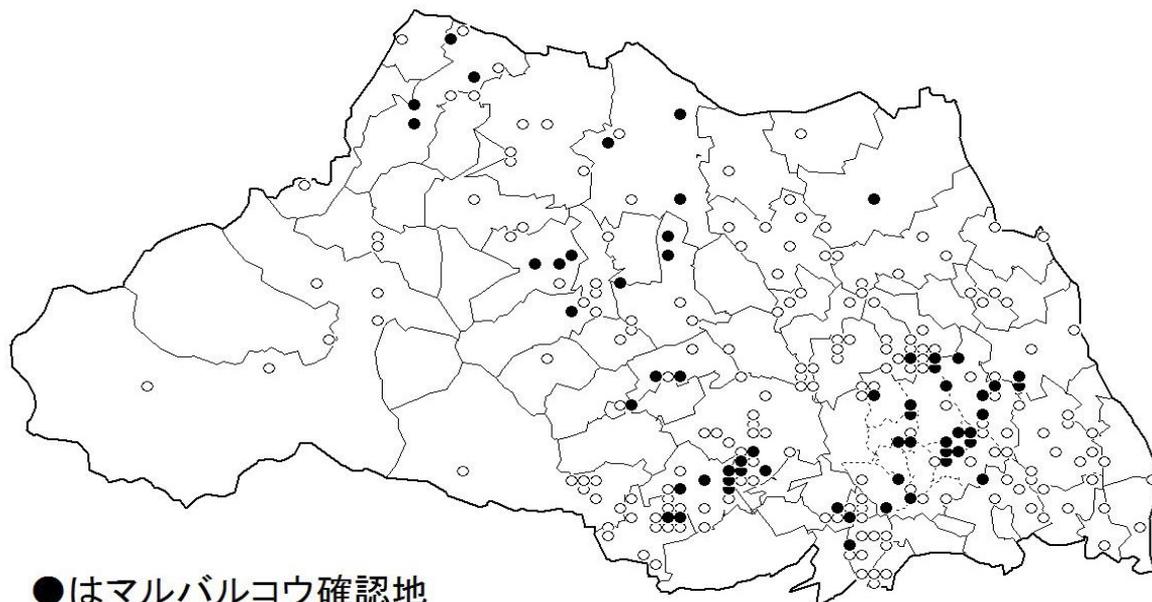
種の概要 茎はつる性で他物に巻きつき長さ数mになる。葉は先の尖った長卵形から心臓形で全縁または3裂し、長い葉柄があつて互生する。夏から秋、葉腋に1~2本の花茎を出し、直径1.5cm程の淡紫色から白色の漏斗形の花を1~2個つける。花柄にはイボ状の突起が密生し、稜がある。本種に似たホシアサガオは花が数個まとまってつき、花柄のいぼ状突起はまばらである。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	8.9
河川敷	B	28	50
水田・休耕田・畑	C	16	28.6
市街地	D	7	12.5
合計		56	100

絶滅危惧種等との競合が懸念されているというが、本県の場合そのような報告は聞かない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1955年に東京近郊での帰化が報告され、現在では東北地方以南で、道端などにやや普通に見られるとある。今回、報告件数自体は少ないが、近年水田・休耕田・畑や道端で、目にする機会が増えている。しかし、分布が拡大している兆候は感じられない。ともかく調査不足は否めない。さらに調査を続行し、県内データを取得し、その実態を把握する必要がある。

20 マルバルコウ(ヒルガオ科) *Ipomoea coccinea* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、低地帯から丘陵帯にかけて分布している。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父線沿いと県西部に記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査では亜高山帯・山地帯を除きほぼ県内全域で確認され、今回の調査と分布が重なっている。

環境別報告件数 今回は 72 件の報告があった。生育地は水田・休耕田・畑が多く、報告の 43.1%を占める。次いで市街地、河川敷、雑木林の順になる。雑木林での確認は少ない。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	6.9
河川敷	B	17	23.6
水田・休耕田・畑	C	31	43.1
市街地	D	19	26.4
合計		72	100

種の概要 つる性 1 年草で他物に絡みつき数mも這い登る。葉はハート形で互生する。春から夏にかけ、朱紅色で五角形ロート状の小さな花が咲く。まぎらわしい種はないが葉だけのときは迷う。葉はいわゆるサツマイモの葉と同じ形となり、全体卵形で基部は心形となる。葉には長い葉柄がある。近縁種では栽培品のルコウソウがあるが、この葉は羽状全裂

であって葉柄がないので全く違うものとして目に映る。

絶滅危惧種等との競合の事例は聞いていない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1850 年前後に花卉として渡来したが、暖地を中心に野生化した。現在では北陸、北関東以南に分布している。本県ではほぼ全域に分布していると考えられるが、今回の調査結果ではデータ数が少なく全域分布の様子はいかがいえない。根拠となる調査データが不足しているが、道端や畑地で目にする機会は増えている。さらに調査を続行し、その実態を正確に把握する必要がある。

21 メリケンガヤツリ(カヤツリグサ科) *Cyperus eragrostis* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、県南部の低地で分布が確認された。埼玉県植物誌 1998 に、この種の掲載はない。県レッドデータブック 2011 の調査では羽生・菖蒲・松伏・上尾・坂戸・狭山・飯能・所沢で確認されている。

環境別報告件数 今回は 32 件の報告があった。生育地は河川敷が多く、報告の 84.4%を占める。次いで市街地、水田・休耕田・畑の順となる。雑木林の報告は無かった。

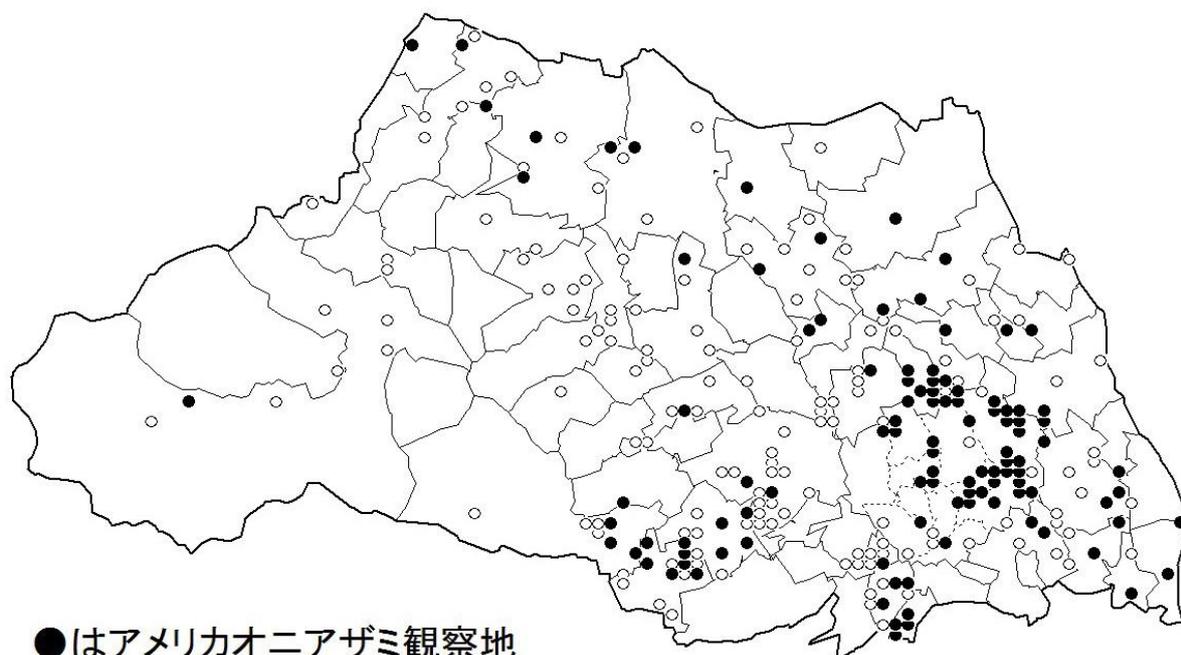
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	27	84.4
水田・休耕田・畑	C	1	3.1
市街地	D	4	12.5
合計		32	100

種の概要 茎は束生し 3 稜形で太くて丈夫。高さ 30~100 cm。葉は茎とほぼ同長、幅 4~8 mm、縁はざらつき、基部は鞘となり茎を包む。茎の基部につく 2~3 個の葉は葉身を欠き紫色を帯びる。総苞片は茎の先に 4~7 個がつき、葉状で花序より著しく長いものもある。花序の枝は数個~10 個以上で 1~10 cm、頂部に多数の小穂が球形に密生する。小穂

は線形、扁平で淡黄緑色、20 花ほどを 2 列につける。鱗片は広卵形。果実はそう果、倒卵形で 3 稜あり、長さ 1 mm でほぼ平滑。絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性は高いといわれるが、今のところ絶滅危惧種との競合については不明である。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1950 年代の渡来といわれる。侵入生物データベースでは 1959 年の三重県、神奈川で 1980 年代に確認、1990 年代後半に分布拡大とある。十分な調査データはないが、現在もとどまることなく拡大を続けているものと考えられる。本県では 1998 年代ではほとんど確認されなかった。その後、県レッドデータブック 2011 では県南部・県西部に広がりを見せた。県北・秩父地域での記録はないが、急速に拡大している外来植物の一つである。今回の調査結果は県レッドデータブック 2011 と重なりがみられないことからデータ不足の感が否めない。さらに調査を続行し、精度の高い県内データを取得する必要がある。

22 アメリカオニアザミ(キク科) *Cirsium vulgare* その他の総合対策外来種



●はアメリカオニアザミ観察地



分布状況 今回の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵北、丘陵南、秩父で確認されている。新たな丘陵北の分布が目立つ。埼玉県植物誌 1998 によれば、行田、春日部、越谷、浦和、草加、八潮、三郷で確認されている。県レッドデータブック 2011 の調査においても、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南に分布となっているが、秩父でも確認されている。

環境別報告件数 142 件の報告があった。生育地は市街地が多く全体の 45.1%を占め、水田・休耕田・畑が 32.4%、河川敷、雑木林の順となる。

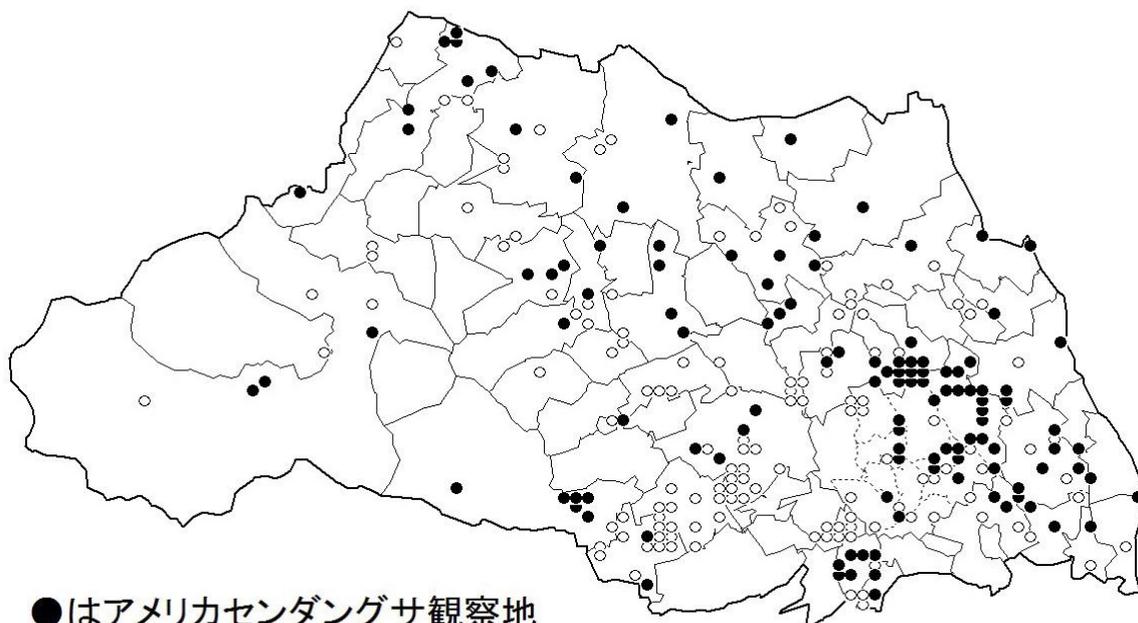
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	10	7
河川敷	B	22	15.5
水田・休耕田・畑	C	46	32.4
市街地	D	64	45.1
合計		142	100

種の概要 茎には鋭い棘のある翼がある。花は赤紫色で枝先に 2,3 個付く。総苞片は線形で先は鋭い刺になる。葉も羽状に大きく切れ込み裂片の先は鋭く刺がめだち、全草が刺におおわれている印象である。ヨーロッパ原産であること

から、別名セイヨウオニアザミと呼ばれる。自然性の高い環境や牧草地に侵入するため、在来種や牧草と競合、駆逐の恐れがあるという。実際に、畑作物、牧草と競合し減収をもたらすとともに、鋭い刺が家畜を傷つけることが問題となり、農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼしている。

当該種の消長 1960 年代北海道で確認された。埼玉県内で立証する十分な調査データはないが、現在もとどまることなく拡大を続けているものと考えられる。当該種は環境への適応性が高く、種子生産力と分散能力に優れているという。また、鋭い刺を持つため、抜き取りなどの駆除が難しいこともあり、分布を広げているようである。さらに調査を続行し、精度の高いデータを取得し、その実態をもとに駆除等の具体的方策を検討する必要がある。

23 アメリカセンダングサ(キク科) *Bidens frondosa* その他の総合対策外来種



分布状況 埼玉県植物誌 1998 では飯能西と本庄市を除いて全県域の分布が確認されているが、今回の調査では飯能西、本庄市でも確認されている。県レッドデータブック 2011 の調査においても、県内全域の分布が確認され、県内定着とみなされている。

環境別報告件数 今回の調査では 188 件の報告があった。水田・休耕田・畑 37.2%、河川敷 32.4%で 70%をしめる。本種は湿りけのある開けた環境を好むようだが、さまざまな環境に適応し定着しているようだ。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	24	12.8
河川敷	B	61	32.4
水田・休耕田・畑	C	70	37.2
市街地	D	33	17.6
合計		188	100

種の概要 茎は切り口が 4 角で紫褐色を帯びる。葉は対生、上方で時に互生。3~8 小葉にわかれる。葉の先は細くとがり細かい鋸歯がある。頭花は黄色で舌状花は小さく外からは見えない。総苞外片は葉のように大きい。種子は扁平でかぎ状の棘が 2 本ある。生活段階としては、成葉の状態は 2-11 月にみられる。つぼみ 5-11 月、開花 9-11 月、結実 10-12 月で、時期が重なり同時進行の形となる。

河川敷や水辺の在来植物への競合、駆逐の恐れがあり、代表的な水田雑草の一つであることから、要注意外来植物とされている。

当該種の消長 日本には、大正時代に渡来し、1920 年琵琶湖畔に群生していたという。既に全国各地で定着しているが、侵入経路等のいきさつは明らかでない。本来は水辺や湿地を好む植物だが、土壌の種類、乾湿などへの適応性が大きいので、全県的な広がりを見せたと考えられる。

24 アレチヌスピトハギ(マメ科) *Desmodium paniculatum* その他の総合対策外来種



分布状況 今回の調査では加須・中川低地南東部、大宮台地、荒川西台地、丘陵南で分布の確認があった。埼玉県植物誌1998では見られなかった入間、狭山、飯能、川越、にも分布が確認される。県レッドデータブック 2011 の調査においても、丘陵南では確認されていなかった。少しずつ分布を広げているようだ。調査の結果だけでは断言できないが、果実が人や動物に付き運ばれるため、今後さらに分布を拡大していく可能性がある。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	16	16.3
河川敷	B	52	53.1
水田・休耕田・畑	C	22	22.4
市街地	D	8	8.2
合計		98	100

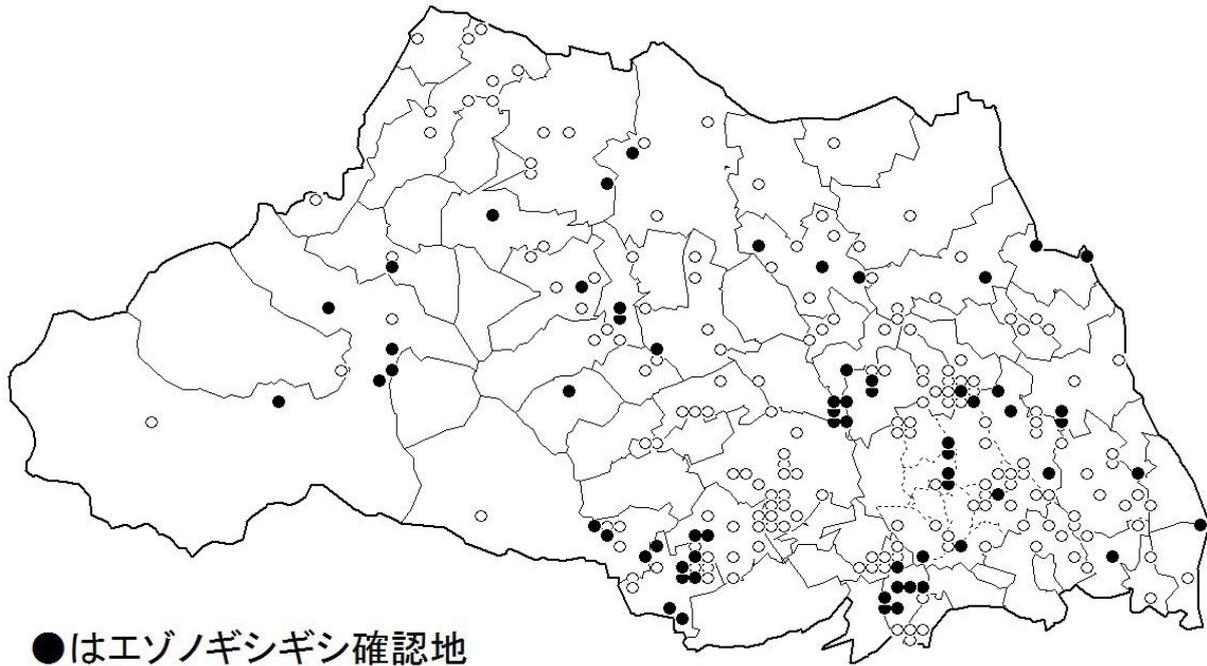
環境別報告件数 98件の報告があった。最も多い報告件数は河川敷の53.1%である。次いで水田・休耕田・畑、雑木林、市街地の順となる。

種の概要 葉は3小葉からなり、小葉は長楕円形、下面は毛が多い。茎の先や葉腋に紅紫色の蝶形花を数個付ける。

果実は扁平で4-6節にくびれ、鉤状に曲がった微毛を密生し衣類や動物によく付いて運ばれる。生活段階としては、幼植物は5-10月と長く見られ、成葉の状態は7-10月に見られる。つぼみ6-10月、開花9-11月、結実10-11月で、開花、結実は次々と同時進行で行われる。

当該種の消長 1965年に大阪で見いだされ、荒地、道端に広がる。関東以西に多いという。県内では1998年代に限定的な分布であったが、今回の調査でも分布の拡大は見られない。増減について調査員の感触によれば「変わらず」が圧倒的に多い。「やや減少」と「やや増加」の少数意見は拮抗している。環境に関する影響では、アレロパシー効果が懸念されているが、現在のところそのような報告は見られない。引き続き調査を行いデータの収集を図り、動向を見守りたい。

25 エゾノギシギシ(タデ科) *Rumex obtusifolius* その他の総合対策外来種



分布状況 今回の調査ではほぼ全県で分布が確認されているが、県北部地域の報告は少ない。埼玉県植物誌 1998 によれば行田、日高、秩父南を除く、ほぼ県全域に分布となっている。県レッドデータブック 2011 の調査でも、県内全域に定着したとみなされている。今回の調査では全県分布と断言できないが、今後調査を続けることにより確かめられるであろう。

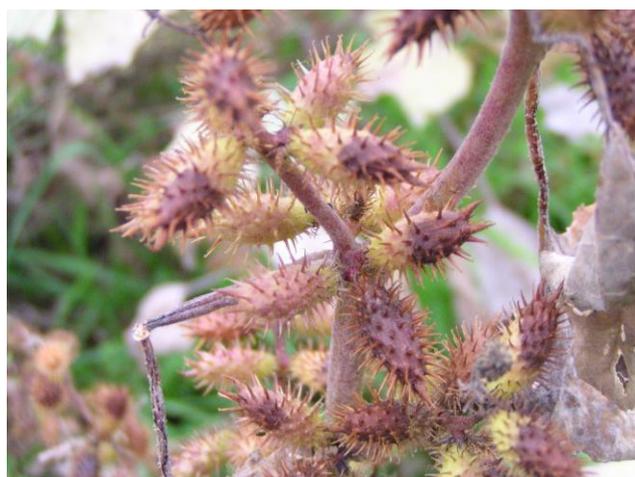
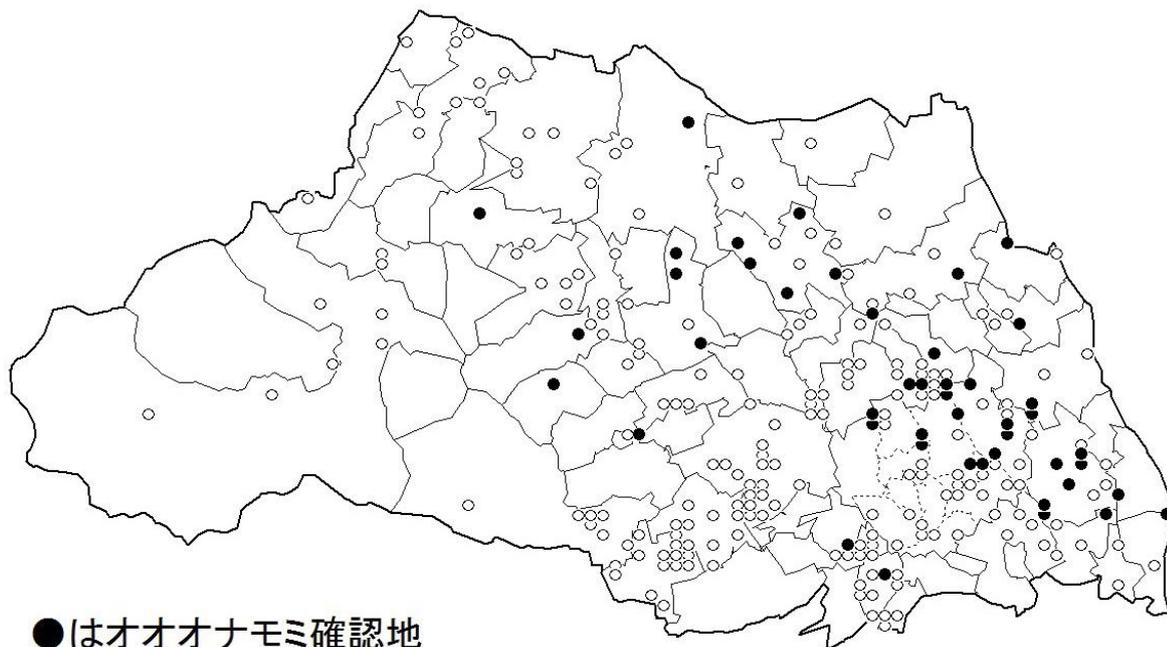
環境別報告件数 今回の報告件数は 113 件であった。最も多いのが河川敷の報告で 46.9%を占める。水田・休耕田・畑、市街地にも報告がある。雑木林は少ない。日当たりの良い湿地を好む植物というが、様々な環境に適応しているようだ。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	4.4
河川敷	B	53	46.9
水田・休耕田・畑	C	37	32.7
市街地	D	18	15.9
合計		113	99.9

種の概要 ギシギシに似るが、根生葉は長い柄があり、ギシギシより幅が広く縁は細かく波打つ。中央脈が赤みを帯びる。茎先に沢山の花を輪生し花穂になる。花穂はギシギシより細長く、全体に赤褐色に見える。果実の翼は卵形で縁に刺がある。生活段階について、幼植物から結実までのすべての段階が 5-10 月の間、同時進行で行われている。繁殖力が強く、亜高山などの自然度の高い環境や、希少種の生育環境にも侵入するため、在来植物や希少種の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされる。

当該種の消長 明治中期に渡来したと考えられる。1909 年に北海道で確認された。その後急激に分布を広げたといえる。本県では 1988 年時点で、低地から低山の少し湿った道端や荒地の日だまりに普通に見られるという記載がある。在来植物への競合を懸念して各地で刈り取りがおこなわれているようだが、根茎からの繁殖が旺盛で目立った効果は上がらないという。今後の調査でデータの集積を重ね、分布拡大の状況に注意を払いつつ、駆除対策などに反映していきたい。

26 オオオナモミ(キク科) *Xanthium occidentale* その他の総合対策外来種



分布状況 今回の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地で確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば、八高線以東の平地、丘陵地に普通に分布するとある。さらに県レッドデータブック 2011 の調査では都幾川、東秩父以外の全県域で確認されている。

環境別報告件数 報告件数 71 件であった。報告の多かったのは水田・休耕田・畑 52.1%、次いで河川敷 42.3% となり、市街地と雑木林が続く。土壌条件よりも、開けた環境に多く生育している傾向がうかがえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	2.8
河川敷	B	30	42.3
水田・休耕田・畑	C	37	52.1
市街地	D	2	2.8
合計		71	100

種の概要 河川・池沼の端や。農耕作地に多く生育する。オナモミに似るが、茎は暗紫色を帯びるものが多い。葉には長い柄があり、心臓形で不規則に切れ込む。果実はオナモミより密につき、刺の長さも含めてオナモミよりも大きい。生活段階としては、幼植物は 5 月から見られるが、成

葉、開花が見られるのは 9-10 月。結実は 10-12 月に確認できる。

当該種の消長 1929 年、岡山県で確認された。農林水産業に係る被害として、世界的に見られる農耕地雑草の一つで、畑作物、牧草などに雑草害を及ぼす他、有毒成分を含むため、家畜の採食を妨げることが問題とされている。さらに調査を続行し、精度の高いデータの集積を図り、その実績をもとに駆除等の方策を検討する必要がある。



分布状況 今回の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地で分布が確認された。丘陵南、丘陵北にもある。埼玉県植物誌 1998 の記録によればその分布域は今回の調査と重なる。県レッドデータ 2011 の調査もほぼ同様の結果を得た。分布はほぼ定着しているといつてよい。

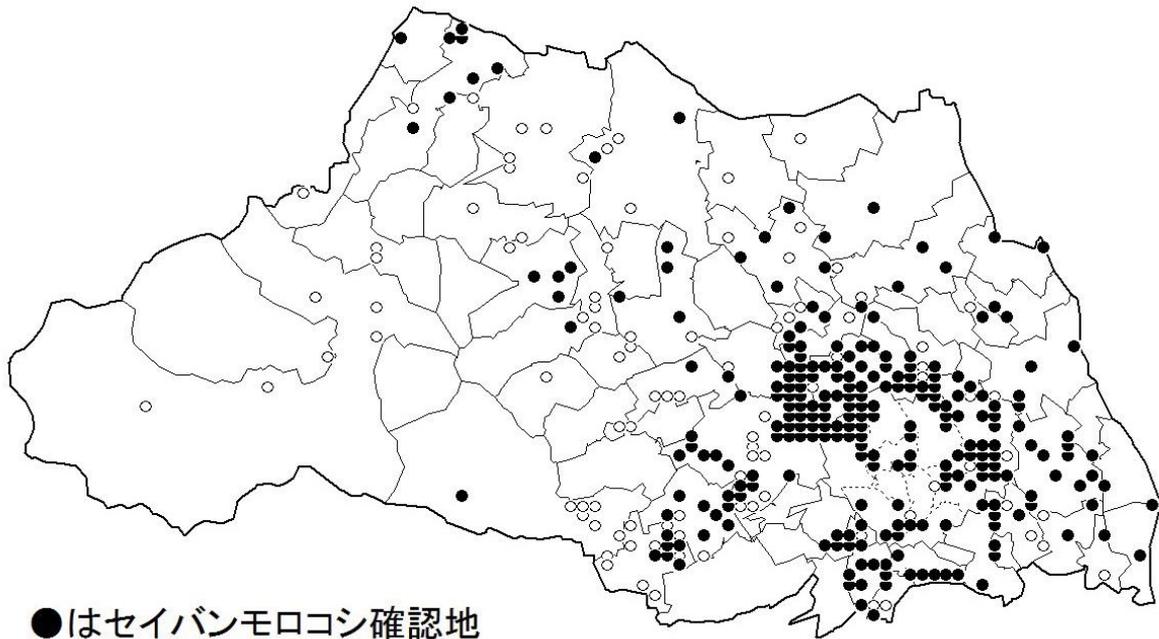
環境別報告件数 報告件数は 144 件であった。最大値は河川敷の 39.0%であった。次いで水田・休耕田・畑 29.8%、市街地 21.3%が続く。雑木林にも出現し、ほとんど環境を選ばないでどんどころにも出現している。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	14	9.9
河川敷	B	55	39
水田・休耕田・畑	C	42	29.8
市街地	D	30	21.3
合計		141	100

種の概要 イネ科の外来種としてよく目立つ存在である。環境別報告件数からは本種が環境は選ばないといえるが、本来的には比較的湿潤地を好む植物であることが想定できる。本種の特徴は小穂に毛があり、その毛がやや長めである

ことからチクゴスズメノヒエやキシユウスズメノヒエと区別することができる。また本種のふさは 3-6 本であることから、もっとふさの数が多いタチスズメノヒエと区別することができる。株立ちになっていることが多く直立する。ふさは小穂が 2-3 列規則正しく並び柱頭と葯が黒紫色であることを特徴とする。

当該種の消長 1915 年に小笠原で気づかれたのが最初である。その後主に関東以南に分布を広げた。暖地性の外来種である。本県では 1998 年において亜高山帯、山地帯、低山西、低山東を除く全域に分布が確認されており、2011 年においても分布に大きな変動はなく、今回の調査でもほぼ同様の分布を示しているところから安定状態に達していると思われる。



分布状況 今回の調査では、丘陵北、丘陵南、荒川西台地、大宮台地、加須・中川低地から多くの報告があった。特にさいたま市を中心に上尾、桶川、川島、越谷、志木、朝霞戸田に集中している。埼玉県植物誌 1998 によれば低山東、低山西、山地、亜高山県を除く県内のほぼ全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査では荒川西台地、大宮台地、加須・中川低地の分布が確認された。

環境別報告件数 409 件の報告があった。非常に報告件数が多い外来種の一つである。最も多くみられる環境は河川敷 47.2% である。しかし市街地にも多くあり 28.1%、水田・休耕田・畑にも多く 28.1% を占める。雑木林にはやや少ないものの環境にかかわらず至るところに分布を広げている。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	13	3.2
河川敷	B	193	47.2
水田・休耕田・畑	C	88	21.5
市街地	D	115	28.1
合計		409	100

種の概要 芽生えの段階ではススキと区別しにくいところがある。一般にススキは大きな株立ちとなるが、セイバンモロコシは株立ちにならず四方に地下茎を伸ばし均一に茎（稈）を立てる。生命力は強く、地下茎の切れ端があればそこから新芽を出して広がっていく。セイバンモロコシの侵入によってススキが駆逐されようとしている状況をよく見かけるが、分布域で比較すると、ススキは山地帯や低山帯など山間部も含めて県全域に分布しているのに対して、セイバンモロコシは山間部にはまだ侵入していない。

当該種の消長 畑の雑草として世界的に有名である。太平洋戦争後関東地方に見いだされるようになり、その後全国各地に広がったとされる。埼玉県においては 1998 年亜高山、山地、低山、丘陵帯を除き県レッドデータブック 2011 全域に分布しており、2011 年においてもほぼ同様の分布である。今回の調査では県北の調査点が少ないものの台地や低地にはしっかり定着し安定状態にあるものと考えられる。



分布状況 今回の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北の報告があった。低山西、低山東、山地、亜高山の報告はほとんどない。埼玉県植物誌 1998 によれば今回の調査結果とよく似ている。県レッドデータブック 2011 の調査ではほぼ同様に結果となっている。

環境別報告件数 報告件数は179件であった。最も報告件数の多い環境は河川敷 70.4%である。土手を埋め尽くすように咲く姿は一つの風物詩になっている。次いで水田・休耕田・畑が 20.7%を占める。こちらは土手を埋め尽くすような光景にはならないが、ごく普通に見かける状況にある。市街地や雑木林でも見かけないわけではないが、その数は少ない。

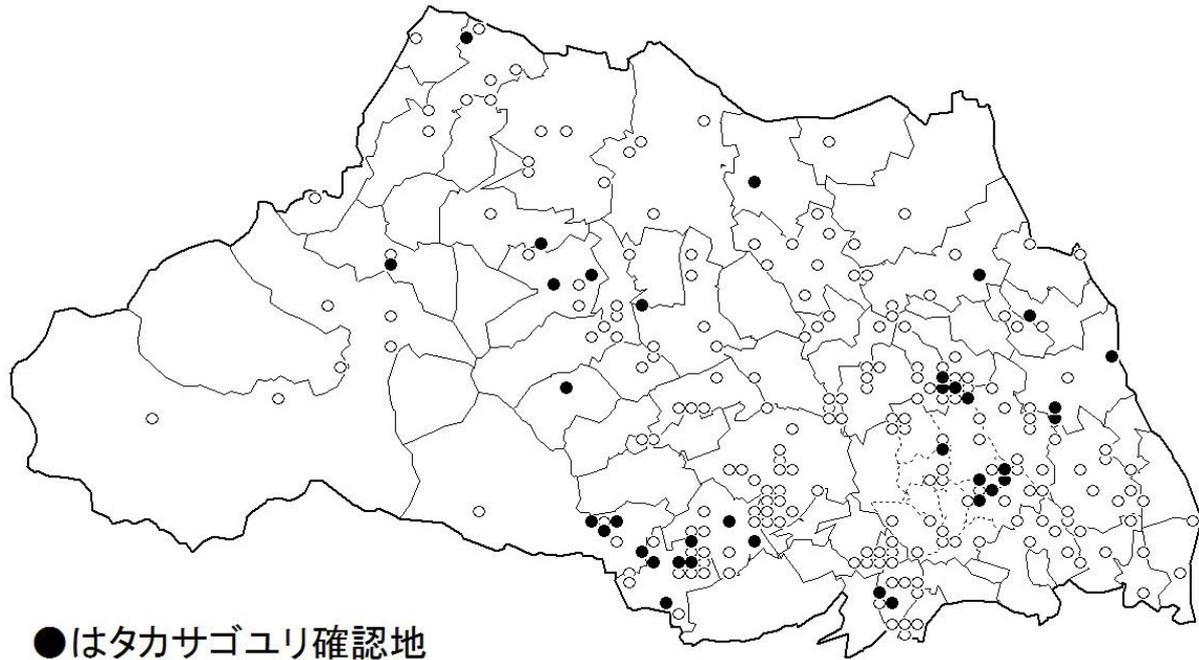
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	1.1
河川敷	B	126	70.4
水田・休耕田・畑	C	37	20.7
市街地	D	14	7.8
合計		179	100

い。

種の概要 土手を黄色に埋め尽くすものはすべてこのセイヨウカラシナ(別名カラシナ)と思われがちだが、最近ではセイヨウアブラナの侵入もあって、よく観察して区別する必要がある。

簡単な区別点は、セイヨウカラシナの葉は葉柄があるのに対して、セイヨウアブラナは葉柄がなく茎を抱く。セイヨウカラシナの葉柄が短い場合もあるが茎を抱くことはない。開花の時期を比較すると、一般的には最初セイヨウアブラナが先に開花して、途中からセイヨウカラシナの開花が引き継ぐ格好になる。

当該種の消長 「日本帰化植物図鑑」によれば侵入時期ははっきりしない。県内の状況は、1998年丘陵帯以東で分布が確認されていた。2011年においても丘陵帯以東で分布が確認されている。今回の調査は県北部の調査点が少ないものの、およそ2011年の分布を維持していることが想定される。さらに調査を進める必要があるが、本種は生態系の中で安定的な地位を獲得していると考えられる。



分布状況 今回の調査では、大宮台地、丘陵北、丘陵南で確認された。荒川西台地の情報が不足していると思われる。県レッドデータブック2011の調査では県北と県南にごくわずか数件の報告しかない。



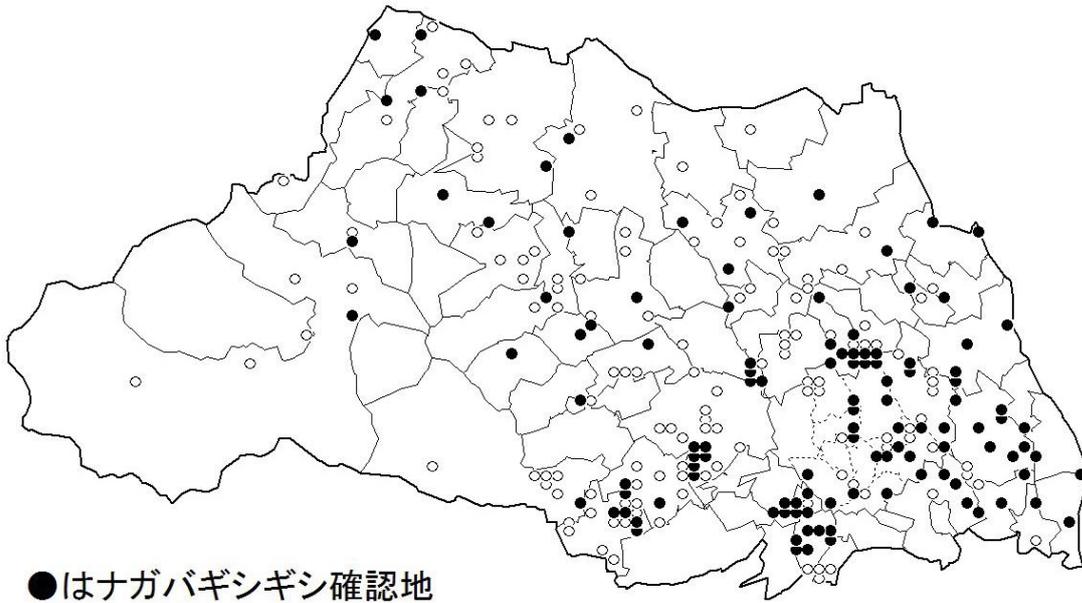
環境別報告件数 45件の報告があった。生育地は市街地が最も多く全体の66.7%を占める。次いで水田・休耕田・畑、となる。雑木林や河川敷は少ない。一般的には比較的人家の近くに生育していることが多い。

種の概要 近縁種にシンテッポウユリがあり、紛らわしい。花が咲けば本種は花被片の色が白地に赤褐色の帯が入るので、すべて白のシンテッポウユリとは区別がつく。とりあえず少しでも薄い褐色帯が認められれば本種として扱うのがよい。成葉だけのときは葉の幅で区別することになるが、この形質は個体ごとに連続していて区別はかなり困難である。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	6.7
河川敷	B	2	4.4
水田・休耕田・畑	C	10	22.2
市街地	D	30	66.7
合計		45	100

当該種の消長 外来種としてみるより鑑賞のためのユリという見方が強い。高速道路ののり面で、除草の作業員が本種だけを残して除草を終わらせている光景をよく目にする。ときに庭先で栽培している例も見受ける。花が大きくてきれいなことなど観賞価値があるため、保護される傾向があり今後も分布域を広げることになるだろう。2011年データにくらべ分布域は大きく拡大した。

31 ナガバギシギシ(タデ科) *Rumex crispus* L. その他の総合対策外来種



分布状況 今回の調査では、ほぼ県内全域で確認されている。埼玉県植物誌 1998 の記録によれば、本県では市街地や郊外の道端や裸地に普通に見られるとあり、分布の広がり記録している。県レッドデータ 2011 の調査でも定着とみなされている。総合すれば県全域に分布していることになる。

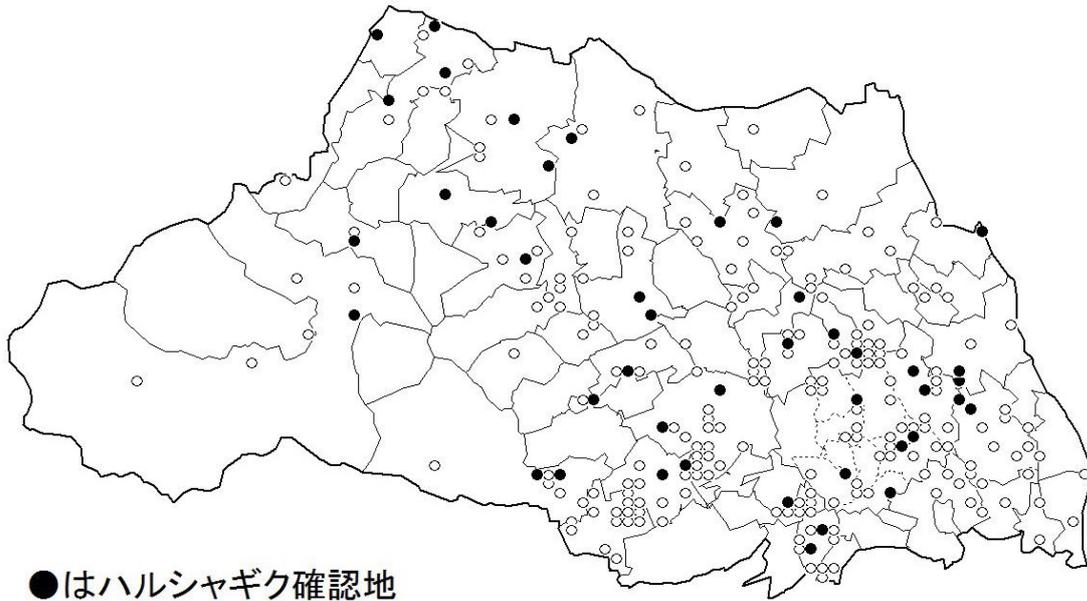
環境別報告件数 今回は 223 件の報告があった。河川敷が 49.8%と半数を占め、次いで水田・休耕田・畑、市街地、雑木林の順になる。いろいろな環境に適応していると考えられる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	12	5.4
河川敷	B	111	49.8
水田・休耕田・畑	C	67	30
市街地	D	33	14.8
合計		223	100

種の概要 全体はエゾノギシギシに似るが、茎は赤みを帯びる。茎の先に紅緑色の花を輪生するが、花の集まった段と段の間が離れていて、まばらに見え穂全体が長いので区別がつく。また、葉も細長く縁が波状に縮むのが特徴となる。成長段階としては、5-11月の期間中、いずれの月にも幼植物から結実までが確認されている。次々と発芽、成長

が同時に行われている。分布の拡大や拡散の可能性が高いといわれているが、調査で実態が明らかになるにつれて適切な評価ができるようになるであろう。

当該種の消長 1891年に東京で帰化が報じられ、現在では全国に広がって、道端や荒地に普通に見られる。繁殖力が強く、分布を広げているようだが、本県では詳細な確認が行われていない。調査を継続し、多くの情報を集めて具体的な対策を検討する必要がある。



分布状況 今回の調査では亜高山、山地を除く全域で確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば丘陵南及び低山東地帯では確認されていない。県レッドデータブック 2011 の調査においても低山東地帯での記録はない。言い換えれば 1998 年以降、丘陵から低山にかけて分布を広げているといえる。今後の調査によっては、県内全域の広がりを確認できるかもしれない。

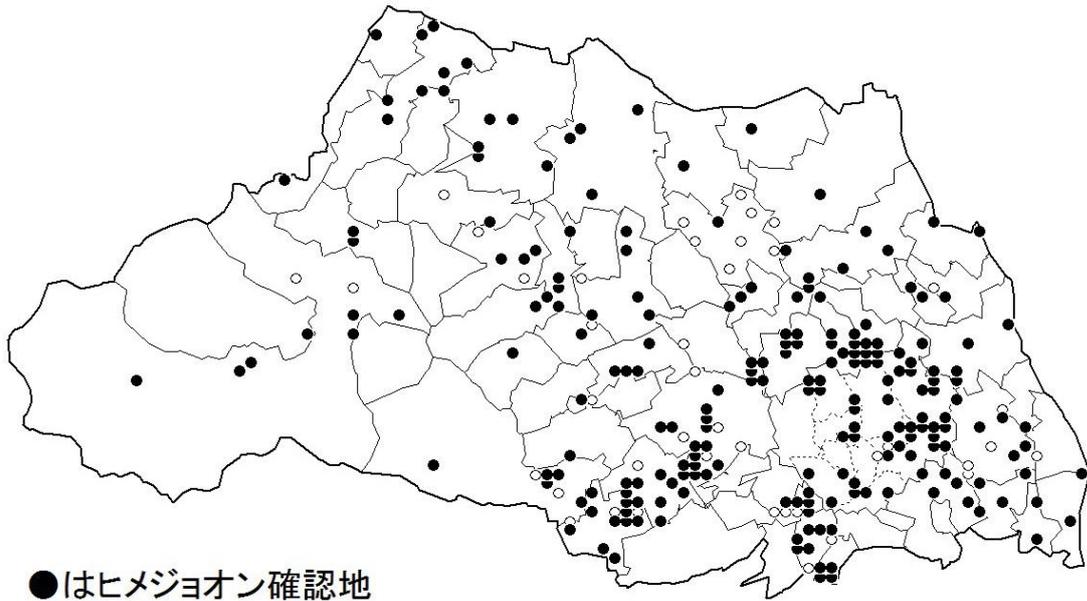
環境別報告件数 報告件数は 50 件。環境別に市街地、河川敷、水田・休耕田・畑、雑木林の順になるが、ほとんど僅差である。あまり環境を選ばず、どこにでも生育しているようだ。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	4
河川敷	B	15	30
水田・休耕田・畑	C	15	30
市街地	D	18	36
合計		50	100

種の概要 別名ジャノメソウ。コスモスに似た花の中心部分は紫褐色、その周りは黄金色に縁どられ、蛇の目傘を思わせる。生活段階としては、成葉は、4-8 月、つぼみは 4-11

月。開花は 4-8 月、結実は 7-8 月となる。6-8 月の最盛期には大きな群落を作ることもある。生態系の被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えているというが、その実態がはっきりしない。さらに調査を進める必要がある。

当該種の消長 明治初期に渡来。古くから良く知られた園芸植物で、強健なため各地の空き地で野生化している。種子は自然にこぼれて発芽し、日当たりの良い庭や空き地などに毎年生える。しばしば大きな群落を作る。分布の拡散は旺盛だが、生態系の被害やその他の情報が不足している為、今後の調査で多くの情報を集め、検討する必要がある。



分布状況 今回の調査では、県内調査地のほぼ全域で確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば吉川町、三郷市、江南町を除き県内全域に分布する。県レッドデータブック 2011 の調査では県内定着とみなされている。

今回の調査では、全ての市町村を網羅している訳ではないので、断言できないが県内全域に定着していると思われる。

環境別報告件数 407 件の報告があった。報告のあった生育地は河川敷と、水田・休耕田・畑が 30%で次いで市街地、雑木林の順になるが、ほとんど僅差である。色々な環境に適

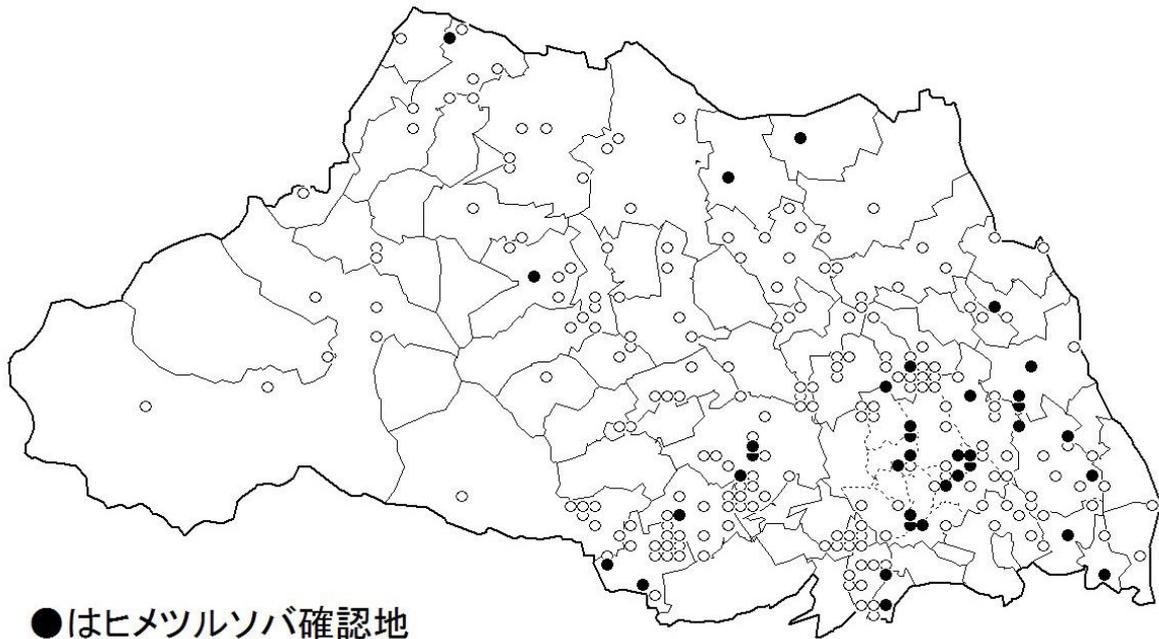
応していると考えられる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	46	11.3
河川敷	B	122	30
水田・休耕田・畑	C	122	30
市街地	D	117	28.7
合計		407	100

種の概要 ハルジオンとよく似るが、茎には白い髓が詰まっており、根生葉は長い柄があり円形に近く、大きな鋸歯がある。花期には根生葉は消える。ハルジオンに遅れて咲きだす。成長段階としては、幼植物、成葉は 4-12 月の間い

つでも見られる。つぼみ、開花、結実も 5-12 月を通して確認している。季節感の乏しい植物と言える。生物多様性を保全する上で重要な地域に侵入し、定着して被害をもたらす可能性が高いといわれるが、本県ではまだ該当例を聞いていない。調査を続け、詳細なデータの集積に努めたい。

当該種の消長 江戸時代末(1865 年ごろ)に観賞用植物として導入された。その後逸出し、明治初年には雑草化している。繁殖力が強く、刈り取っても残った根茎で再生するため分布を広げている。在来草本植物、農作物、牧草などに影響が及ぶものと考えられる。



分布状況 今回の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北で分布が確認された。埼玉県植物誌 1998 によれば日高、ふじみ野、富士見、和光、桶川で確認されているのみである。県レッドデータブック 2011 の調査では上記 1998 よりも少し分布が拡大している。

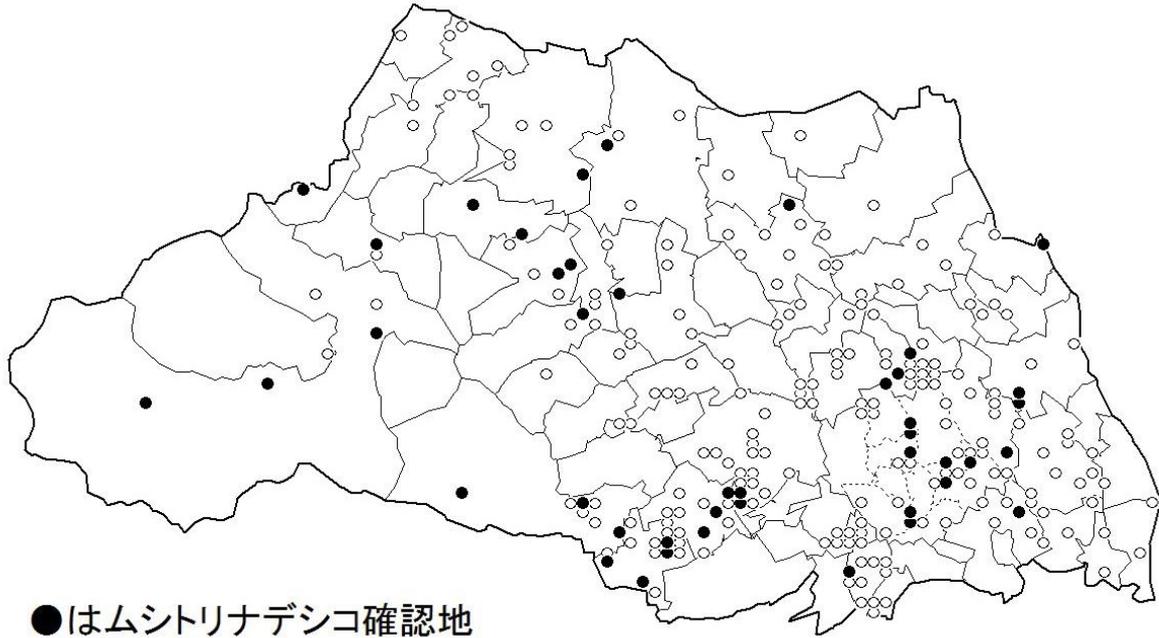
環境別報告件数 総報告件数は 50 件であった。市街地の報告が圧倒的に多く 70% を占めている。河川敷にも水田・休耕田・畑でも見られないわけではないが、市街地になじんだ外来種といえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	6
河川敷	B	7	14
水田・休耕田・畑	C	5	10
市街地	D	35	70
合計		50	100

種の概要 本種は路傍でよく見かける。この性質があり、立ち上がることはほとんどない。つるのようにはならない。枯れても多年草なので毎年同じ場所に芽を出す。直径 7-8mm のピンクの花（花序）長期間にわたって咲か

せる。ピンクは日が経つにつれ白色がかっていく。生態系被害防止外来種リストにおいて、その他の総合対策外来種となっているが、ヒメツルソバが広がることで不都合な点はあまり聞かない。下水溝をふさぐくらいのデメリットはあるかもしれない。

当該種の消長 明治時代、園芸用として導入された。本来観賞用に栽培されているものだが今では逸出して野生化して個体を多く見る。県内の状況を見ると、1998 年には県南にわずかに見られたものが、2011 年には分布域が広がり、日高、ふじみ野、富士見、和光、桶川に加えて、所沢、入間、狭山、飯能、川越、浦和、越谷、草加が分布域となった。そして今回の調査では、小川、本庄、行田、羽生、杉戸、春日部、八潮、さいたま市全域が加わった。本種の分布域は現在進行形でも拡大しつつある。



分布状況 今回の調査では荒川西台地の報告がすくないもののほぼ県全域から報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、いくつかの市町村から報告はないものの、ほぼ県内全域に分布する。県レッドデータブック 2011 の調査でも今回の調査結果とほぼ似たような分布であった。

環境別報告件数 50 件の報告があった。最も報告の多かった生育地は市街地であった。その数値は圧倒的で 70% である。本種は路傍や庭先でよく見かける一方、雑木林周辺ではほとんど見かけない。

その結果が数字となって現れている。次いで河川敷 14%、水田・休耕田・畑 10%、市街地 6% と続く。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	6
河川敷	B	7	14
水田・休耕田・畑	C	5	10
市街地	D	35	70
合計		50	100

種の概要 ナデシコ科の植物の中でかなり大きな特徴をもった植物である。茎の節間に粘る部分があり、ときどき小昆虫が捕まっている。そのことから別名ハエトリナデシコとも呼ばれる。

しかし本種は食虫植物ではない。葉の色は特徴的な粉白色で、葉の基部は茎を抱く。紛らわしい種はほかにない。

当該種の消長 江戸末期、花卉として導入された。その後逸出し野生化した。県内の分布状況は 1998 年の調査ではほとんど全域分布ではあったが、皆野、寄居、小川、東松山、川越、入間、越谷など 20 市町村からの報告はなかった。2011 年の調査では小川、東松山、日高、吉川、庄和など 10 市町村のみが報告のない状況になった。つまり分布域が少し拡大したわけである。そして今回の報告はほぼ 2011 年と同じような分布を示している。したがって本種はほぼ県全域に分布しているとはいいいながら、まだ報告のない市町村がいくつかあり、詳しく見ればさらに分布が広がる余地を残している。今回の全報告件数は 50 件であった。報告件数が多いとは言えない。さらに調査を継続することで現在の分布域が明らかになるであろう。



分布状況 今回の調査では主に大宮台地、荒川西台地、丘陵南に確認された。埼玉県植物誌 1998 には加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北の分布がある。県レッドデータブック 2011 の調査では埼玉県植物誌 1998 とほぼ同じ分布を示している。

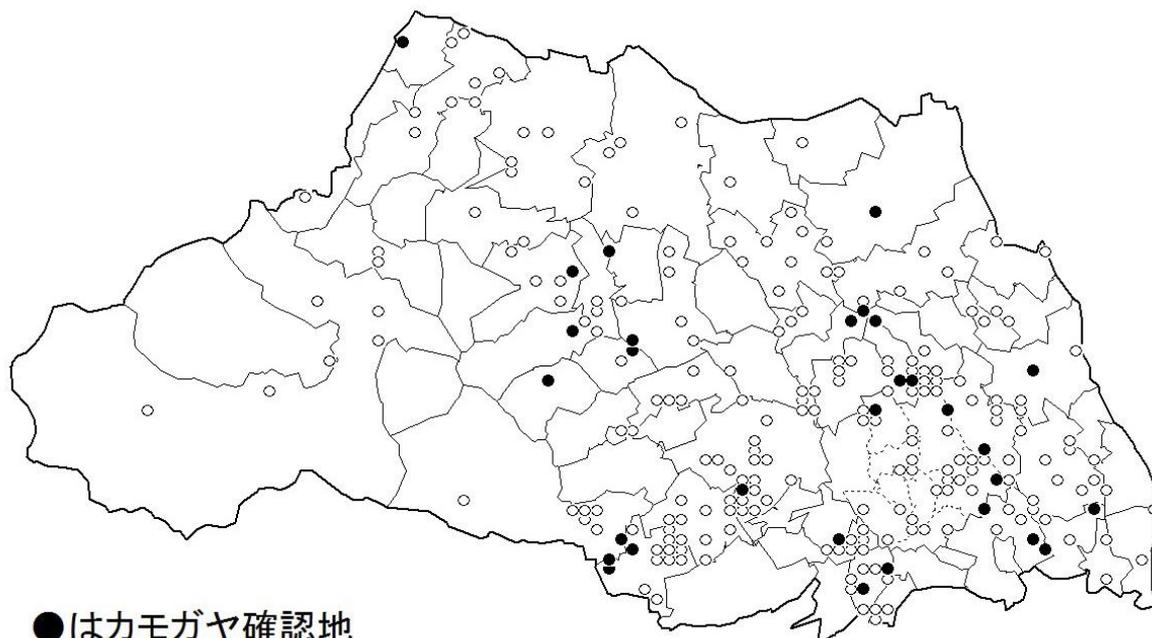
環境別報告件数 今回の調査では 26 件の報告があった。市街地の報告が最大で 42.3% を占める。次いで水田・休耕田・畑が 34.6% となっている。雑木林や河川敷は少ない。

種の概要 叢生(株立ち)していることが多く単独で大きな群落をつくる傾向がある。比較的乾燥した日当たりのよい場所によく見かける植物である。ふさの軸にきわめて長い毛が密生しており、どれが小穂なのかわかりづらい。本種は作物被害が懸念されているが、繁茂することによる不都合な例は今のところ聞いていない。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	11.5
河川敷	B	3	11.5
水田・休耕田・畑	C	9	34.6
市街地	D	11	42.3
合計		26	99.9

種の消長 昭和 20 年代、愛知県で発見されたのが始まりである。現在はおよそ関東地方以西に分布を広げている。本県では 1998 年の段階で丘陵帯から低地帯にかけて分布していることを確認しているが、2011 年の段階でも分布域に大きな変動はない。今回の調査では、飯能、朝霞、志木、さいたま市からの報告があるが、実際の分布はもっと広がっている可能性がある。さらに調査を進める必要があるが、全般的に見て本種は定着段階にあり、安定しているというべきだろう。

37 カモガヤ(イネ科) *Dactylis glomerata* L. 産業管理外来種



●はカモガヤ確認地



分布状況 今回の調査で大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北、加須・中川低地からの報告があった。ほぼ低地～台地～丘陵に分布する。埼玉県植物誌1998によれば県内全域の分布であった。県レッドデータブック2011の調査によってもほぼ全域分布である。こうしてみると今回の調査は分布域が減少しているように思えるが、調査不足の側面も否めない。

環境別報告件数 33件の報告があった。最も多かったのは河川敷 36.4%である。しかし水田・休耕田・畑や市街地にも多く、環境を選ばずに分布域を拡大している可能性がある。雑木林のデータ数は少ないが、データをさらに集めたうえで考察するのが適切である。

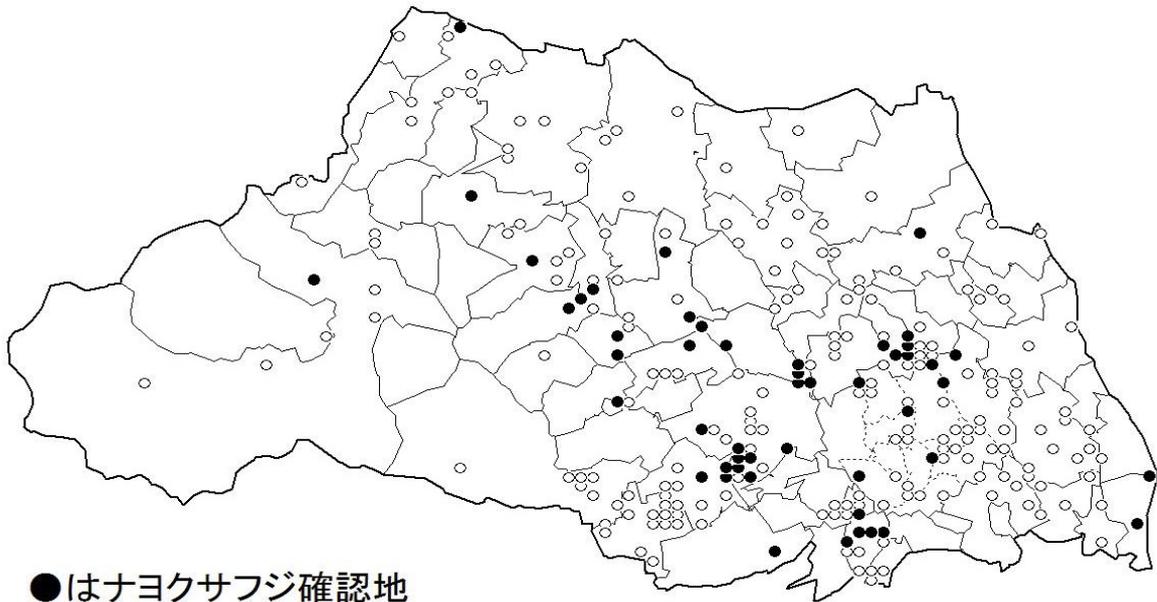
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	12.1
河川敷	B	12	36.4
水田・休耕田・畑	C	9	27.3
市街地	D	8	24.2
合計		33	100

雑木林のデータ数は少ないが、データをさらに集めたうえで考察するのが適切である。

種の概要 花粉症の原因となるイネ科植物である。開花は5月から8月頃の間である。もともと本種は牧草として輸入されたもので、開花の前に刈り取ってこれを干し、家畜の飼料とした。

1年の間に何度も刈り取ることができ、その干草はたんぱく質など栄養分を多く含み良質の牧草とされた。また英名 cocks-foot grass の通り、ニワトリの飼料としても利用されたのであろう。産業管理外来種とされるのは、牧草としての用途がある一方で人体に対する健康被害もでていることから、本種は野放しにしないで、適切な管理の下で利用すべきものとして指定されたものである。

当該種の消長 明治初期、牧草としてアメリカから輸入された。オーチャードグラスとの呼び方も広く流通している。その後逸出、野生化し、無管理状態で在来生態系に混じるようになった。現在では県内各地にまんべんなく広がっており、各種の生態系になじみ、安定的に定着しているものと思われる。この実態は継続的な調査によって明らかにされるであろう。



分布状況 今回の地調査では、大宮台地と荒川西台地、丘陵南で確認された。埼玉県植物誌 1998 によれば、児玉、熊谷、川島での記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査で深谷、寄居、秩父、川越、桶川、三郷で新たに観察された。

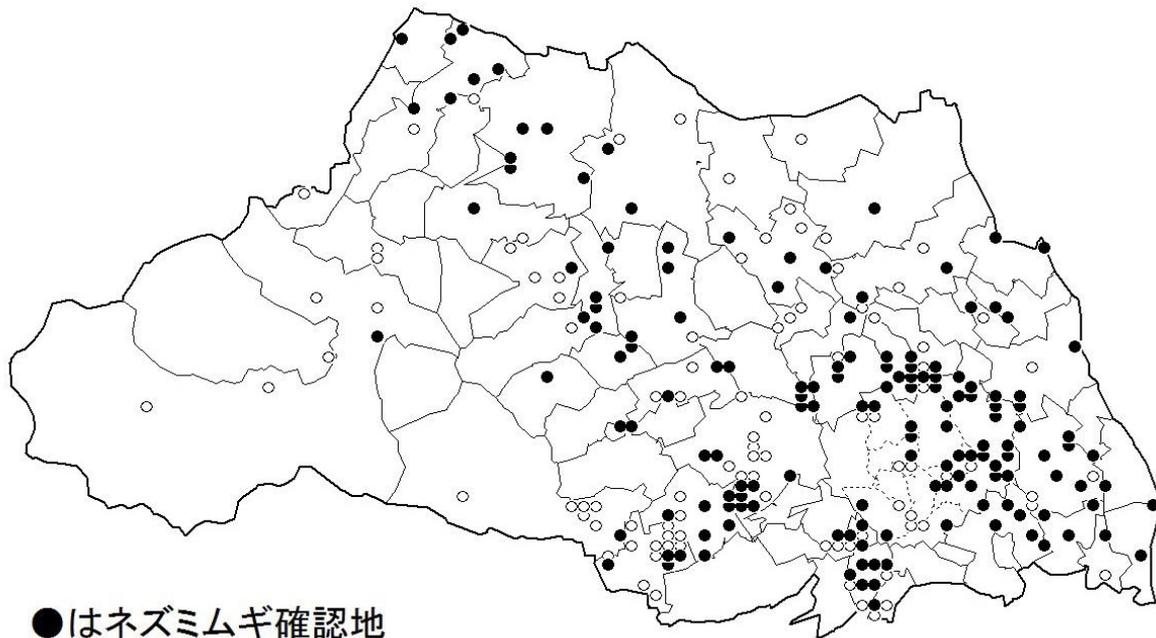
環境別報告件数 77 件の報告があった。最も多くみられる環境は河川敷で 75.3%であった。次いで、水田・休耕田・畑、市街地、雑木林の順になる。1998 年代は緑肥として使われたよう

だが、逸出して河川敷に分布を広げている。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	1.3
河川敷	B	58	75.3
水田・休耕田・畑	C	17	22.1
市街地	D	1	1.3
合計		77	100

種の概要 つる性の 1 年性草本で、葉の先が巻きひげ状になり他物に絡みつく。茎は四方に広がり地面を覆う。春から夏にかけて葉腋に花序を立て、紫色の蝶形花を一方向に穂状につける。本種の茎や葉は毛がほとんどないこと、旗弁の爪部が舷部のほぼ 2 倍あることで、クサフジと区別する。本県では、河川敷や土手に分布を広げており、今後在来植物に影響を与えると思われる種として位置付けられている。

当該種の消長 1943 年に熊本から帰化が記録された。その後長野県、群馬県で確認された。群馬県では 2000 年に確認されたが 2005 年以降は急増している。今では北海道から琉球に分布する。空中窒素の固定や、アレロパシー作用により、土壤環境に影響を及ぼす可能性が指摘されている。今後の報告を待ちたい。



分布状況 今回の調査では山間部を除く県内全域から報告があった。加須・中川低地の利根川沿いの分布が薄くなっているように見えるが、これは調査地点そのものの数が少ない結果である。埼玉県植物誌 1998 によれば山間部（飯能、秩父大滝・荒川、小鹿野）を除いた全域分布であった。県レッドデータブック 2011 の調査でもほぼ同様の分布が明らかにされている。

環境別報告件数 今回の報告件数は 231 件であった。河川敷の報告が最も多く 45.5%を占める。

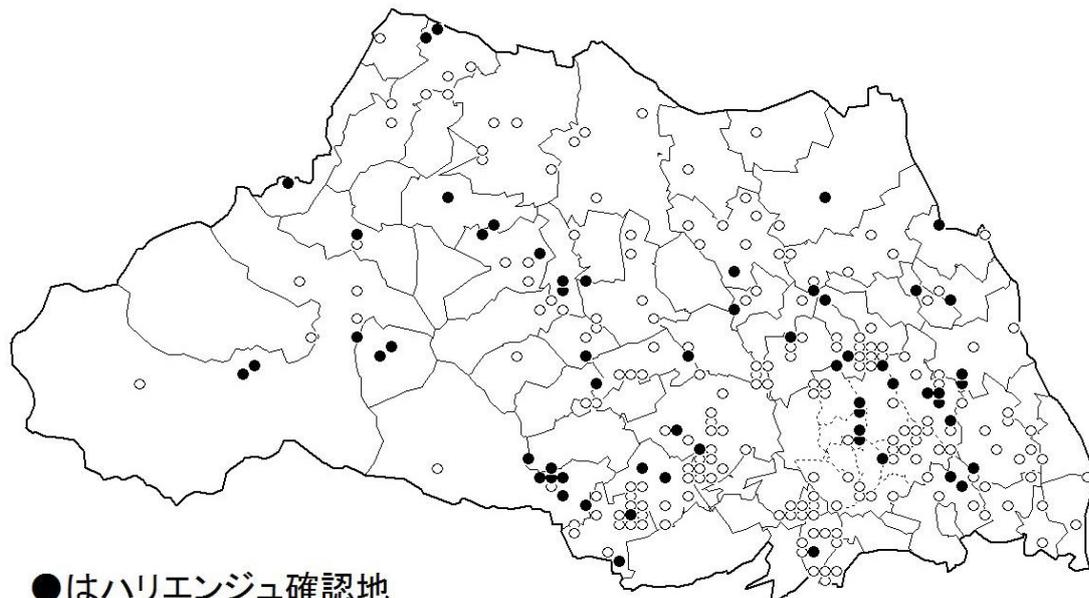
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	21	9.1
河川敷	B	105	45.5
水田・休耕田・畑	C	58	25.1
市街地	D	47	20.3
合計		231	100

次いで水田・休耕田・畑 25.1%、市街地 20.3%が並んでいる。路傍、空地、荒地、残土置き場など環境を選ばず至るところに分布しているといえる。

種の概要 本種は越年草である。花粉症の原因になっている。また果実は有毒でアレロパシー効果があるとされているが、牧草として使われてきた事実と矛盾するように思う。河川敷に多いということは、比較的多湿を好む植物といえるかもしれない。生育地では、広く集合して単独の群落をつくる傾向があり、侵略的な外来種としての特性を発揮している。類似種にホソムギがあり、形態が連続しているとの見方もでき区別が難しい。本種の小穂は小花 10 以上で護穎に芒がある。ホソムギの小穂は小花 10 以下で護穎に芒はない。

当該種の消長 もともとは牧草として明治初期に導入された。道路のり面にも利用されてきた。その後逸出して完全に野生化した。道路の土留めや緑化に利用されるところから山間部にも分布がありそうだが、今のところ報告はない。以前からの分布図（植物誌・レッドデータ）と比較する限り、ほぼ各種の生態系に混入してすでに安定的な位置を占めていると考えられる。

40 ハリエンジュ(マメ科) *Robinia pseudoacacia* 産業管理外来種



分布状況 今回の調査ではほぼ県内全域に分布が見られるが、県北部の報告は少ない。埼玉県植物誌 1998 によればほぼ県全域に分布していた。県レッドデータブック 2011 の調査もそれを裏付けるものであり、定着とみなされている。

環境別報告件数 報告件数は 81 件であった。報告件数の多い環境は河川敷で 35.8%あるが、雑木林、市街地、水田・休耕田・畑も 20%前後で続く。環境を選ばず広範囲に分布している。

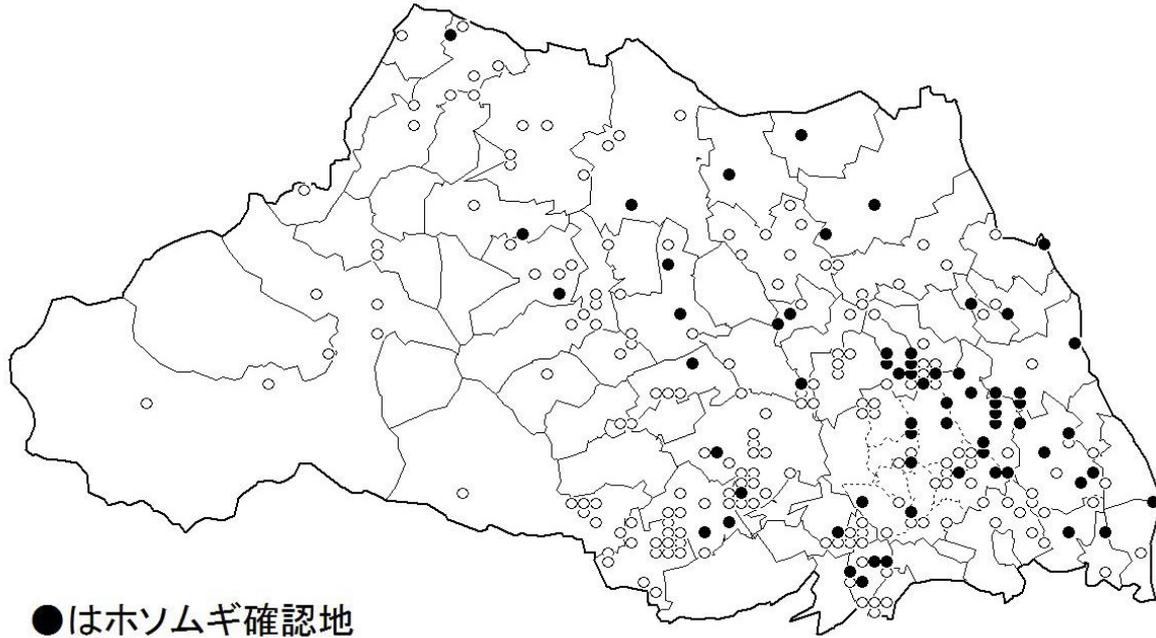
種の概要 5-6 月、小枝の葉腋からフジの花に似た白い蝶形花を房状に多数咲かせる。葉は長い柄を持った 3 出複葉。枝には鋭い刺がある。生活段階としては、幼植物は 5-11 月、開花は 5-10 月、結実は 5 月となっている。5-7 月には、幼植物から結実までが、ほぼ同時期に確認されている。本種は、実生、萌芽による繁殖が旺盛に行われ、非常に成長が速く、短期間で群落をつくるため、

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	19	23.5
河川敷	B	29	35.8
水田・休耕田・畑	C	15	18.5
市街地	D	18	22.2
合計		81	100

生態系に被害をもたらす可能性が高いとされる。特に絶滅危惧種の生育に甚大な被害をもたらす可能性が高いとされる。

当該種の消長 1873年に導入され、荒廃地の緑化、街路樹、砂防林として植栽されたものが、逸出して拡大し全国的に分布した。本県でも1998年以前から分布の拡大を続け、ほぼ全県域で確認されている。伐採もされているが、半面で良質の蜜源として利用されているため、利益とリスクを検討する必要がある。

41 ホソムギ(イネ科) *Lolium perenne* L. 産業管理外来種



分布状況 今回の調査では分布が県南部、県東部に寄っている。県西部、秩父、県北部の報告件数はわずかである。埼玉県植物誌 1998 では秩父地域と狭山・日高・飯能を除いた全域に分布している。さらに県レッドデータブック 2011 の調査では埼玉県植物誌 1998 とほぼ同様の分布を示している。

環境別報告件数 報告件数 85 件であった。河川敷に多く分布するものと思われ 50.6%であった。続いて水田・休耕田・畑が 27.1%である。この傾向はネズミムギと実によく似ている。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	4.7
河川敷	B	43	50.6
水田・休耕田・畑	C	23	27.1
市街地	D	15	17.6
合計		85	100

種の概要 類似種にネズミムギがあり区別が難しい。本種は多年草である。(ネズミムギは越年草である。) とりあえず、小穂に芒のないものをホソムギとする。さらに 1 小穂中の小花の数が 10 個以下であればホソムギでよい。

しかし、多くの標本を観察するとネズミムギとホソムギの境がはっきりしなくなることがある。両者の雑種にネズミホソムギというのがあり、どちらにも振り分けられない場合はこのネズミホソムギを充てる場合もある。分布域をネズミムギとホソムギで比較するとネズミムギの方が広い。なお、日本イネ科植物図譜によれば、日本に純粋なホソムギはほとんどなく、雑種のホソムギが多くあると指摘している。

当該種の消長 明治初期、ネズミムギなどとともに牧草として導入された。その後逸出し、野生化した。県内では、埼玉県植物誌 1998 においても県レッドデータブック 2011 にしても分布域は加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北、低山東、低山西に及んでおり、大きな相違はない。安定した状態にあるとみてよい。

42 ナルトサワギク(キク科) *Senecio madagascariensis* Poir. 特定外来生物・緊急対策外来種



分布状況 今回の調査において荒川西台地に属する朝霞市から報告があった。埼玉県植物誌 1998 に記載はなく、県レッドデータブック 2011 の調査でも記録されていない。今回の調査結果は埼玉県初の記録であろうと思われる。

環境別報告件数 3 件の報告があった。生育地は新河岸川と黒目川の合流地点の河川敷である。



種の概要 オカオグルマやサワオグルマに類似する。舌状花と筒状花の両方がある。頭花は同長の総苞内片に包まれ、その外側基部にごく短い総苞外片（小苞葉とする見方もある。）10 片くらいがある。総苞の形状はノボロギクに似る。葉柄の基部は茎を半分くらい抱く。環境の変化に強く、年間を通して開花する。生活段階をみてもわかるように常につぼみ、開花、結実がそろっている。

当該種の消長 この種の報告件数は極めてわずかではあるが、特定外来生物の埼玉県初記録という立場でここに記す。現地では県の準絶滅危惧タコノアシと混生しており、将来的にタコノアシが減少するのではないかと危惧される。大きさ・広がりについて、10 月にはごくわずか数株であったものが、11 月には数百株に増えている。早急な対策が必要である。

和名

ナルトサワギク

生活段階 1:幼植物 2:成葉 3:つぼみ 4:開花 5:結実 6:枯死

月\段階	1	2	3	4	5	6	計
4							0
5							0
6							0
7							0
8							0
9							0
10			2	2	2		6
11			1	1	1	1	4
12							0
計	0	0	3	3	3	1	10

環境

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	3	100
水田・休耕地・畑	C	0	0
市街地	D	0	0
合計		3	100

a:1-3株 b:4-9株 c:10-99株 d:100-999株 e:1000-9999株 f:10000株以上

大きさ・広がり

g:0.05m²未満 h:0.25m²未満 i:1m²未満 j:10m²未満 k:100m²未満 l:100m²以上

月\段階	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	計
4													0
5													0
6													0
7													0
8													0
9													0
10	2												2
11				1									1
12													0
計	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3